神社de献血
善意が結実したコロナ禍の新たな献血会場

明治大学法学部自由講座講義録　社会起業家・松尾悦子氏にきく

齊尾恭子[†], 松尾悦子[‡], 阪井和男[*], 片山淳[**]

[†]サービス創新研究所 研究員　1522671@mwu.jp
[‡]国際災害対策支援機構 代表理事 desk@unglobal.org
[*]明治大学 名誉教授 saka1kaz@yahoo.co.jp
[**]編集者 puddleby0317@gmail.com

Blood Donation at Shinto Shrines
Good Intensions Come to Fruition with New Blood Donation Camps During the Coronavirus Pandemic

Lecture Record of the Free Lecture in the School of Law, Meiji University,
Interview with Ms. Etsuko Matsuo, Social Entrepreneur

Kyoko SAIO[†], Etsuko MATSUO[‡], Kazuo SAKAI[*], Atsushi KAYATAMA[**]

[†]Researcher, Institute for Service Innovation Studies
[‡]Representative Director, General Foundation for International Disaster Countermeasure
[*]Professor Emeritus, Meiji University
[**]Editor

はしがき

これは、コロナ禍の2021年5月18日に実施された明治大学法学部自由講座の講義録です。この講義では、社会起業家の松尾悦子氏をゲストスピーカーとして迎え、阪井和男先生と大学生が聴き手となりました。この講義で松尾氏が話されたコロナ禍での社会事業の実践は、学生たちにとってきわめて示唆に富むものだったようです。そこで、松尾氏が学生に話されたことを講義録という形でまとめることにしました。この講義録を通じて、松尾氏がどのようなプロセスや考え方で社会を変える活動をおこなっているのかについて伝えることができれば幸いです。

前半は、コロナ禍をきかっけに手がけられた事業（「神社de献血」）について松尾氏が講義で話されたことをまとめました。後半は、聞き手であった学生たちと阪井先生が、21の質問を松尾氏に投げかけ、氏がそれに答えるという質疑応答の様子をまとめました。この質疑応答のパートでは、学生たちが松尾氏のお話を深堀りし、事業を立ち上げる際の技や知恵を引き出そうと苦心しているさまがうかがえます。

なお、この講義録では松尾氏を、社会の課題を事業によって解決することをめざして活動している事業家（井上、2021）であるということから社会起業家と表現しています。

内容

はしがき
講義録「神社de献血」 -善意が結実したコロナ禍の新たな献血会場-
Ⅰ. 本講義の前に考えておきたいこと(阪井和男)
1. 豊かさについて考えを広げる
2. 松尾氏の活動について
Ⅱ.「神社de献血」の仕組み(松尾悦子)
1. きっかけ
2. 「神社」のもつ強みに注目
3. 「神社」×「スタンプ」の持つ魅力を手がかりに
4. 10ヵ月で54の神社とつながる
Ⅲ.「神社de献血」実施までの流れ(松尾悦子)
1. 計画から実施まで
(1)まずは知り合いの宮司さんから
(2)開始早々驚きの展開へ
(3)有償の御朱印帳の発行へ
(4)オリジナルのスタンプ帳の配付開始
(5)メディアの力で一気に拡散
2. 実施後の環境変化と気づき
(1)認知度の向上
(2)日本赤十字社との連携の変化
(3)共催実施の実現
(4)大阪府神社庁との組織的連携へ
(5)悪天候をものともしない地域のつながり
(6)地域の方々との組織的連携へ
(7)3つの新しい成果
(8)宮司さん方のご提案で、当初の構想がほぼ実現
Ⅳ. 実現させるポイント(松尾悦子)
1. 神社で献血をおこなうということ
2. 実施の工夫
(1)「お力添えいただきたいこと」の明示
(2)まずはオフライン告知
(3)オフライン告知のコツ
(4)神社における意思決定機関とは
3. 赤十字とのかかわり
(1)赤十字とわたしたちの活動のちがい
(2)神社と赤十字の間に立ち実施をサポート
(3)全国展開のためにチラシのデザインの統一
(4)オリジナルのスタンプ帳が広げた、地域のみなさんのかかわりかた
Ⅴ. 松尾悦子氏への21の質問(松尾悦子×阪井和男×明治大学法学部自由講座受講生)
Ⅳ. 講義時使用スライド
セレンディピティに導く「豊かさ」はどこにあるか?(阪井和男)
本講義録について-行動が共鳴をつくる-(片山 淳)
おわりに(齊尾恭子)
謝辞
参考資料
一般財団法人国際災害対策支援機構概要
著者紹介

講義録

「神社de献血」 -善意が結実したコロナ禍の新たな献血会場-

話し手：松尾悦子（一般財団法人国際災害対策支援機構 代表理事）
聞き手：阪井和男（明治大学法学部 教授）、明治大学法学部自由講座受講生
実　施：2021年5月18日実施：明治大学法学部自由講座春学期第5講

Ⅰ. 本講義の前に考えておきたいこと（阪井和男）

1. 「豊かさ」について考えを広げる

松尾悦子さんのお話を聞くにあたって、少しポイントを提示しておきますね。「豊かさ」について注目していただきたいのです。
ただ、このように言うと、つい、ゲストの方のお話の中の次のような点にばかり注目して聞いてしまいがちです。
今回のゲストスピーカーが考える「豊かさ」はどのようなものか。

1) ゲストスピーカーがある地域に外部から関与するときに、その地域の持つどのような「豊かさ」に目を付けたのか。
2) ゲストスピーカーのおこなっている活動の持つどのような強みを活かすことにしたのか。
3) その結果、ゲストスピーカーのおこなっている活動とその地域の人々が、どのように共鳴したのか。そして、どのようなムーブメントを創り出すことになったのか。

今回は、あえてそうではなくて「豊かさというものは、そもそも発見できるものなのか」について考えてみてください。

2. 松尾氏の活動について

今回のゲストスピーカーの松尾悦子さんは、「国際災害対策支援機構」（https://www.unglobal.org/ ）というカッコいい名前の組織の代表理事です。

この組織の活動は、非常に多様で幅が広いため、今回は、時間も限られていますし、その中から、「神社de献血」という取り組みについてお話をしていただきます。「神社de献血」というのは、その名の通り神社を献血会場にするという取り組みです。

ところで、松尾さんが代表理事を務められているこの「国際災害対策支援機構」は、SF特撮人形劇『サンダーバード』からインスピレーションを得ているそうです。
『サンダーバード』は、1965年から1966年にイギリスで放送されていた人形劇による特撮テレビ番組です。世界各地で発生した事故や災害で絶体絶命の危機に瀕した人々を、「国際救助隊」（IR―International Rescue）と名乗る秘密組織がスーパーメカ「サンダーバード」を駆使して救助する活躍を描く物語です。
動画を検索して一度見ていただくとイメージがつかみやすいですよ。

Ⅱ.「神社de献血」の仕組み（松尾悦子）

1. きっかけ

わたしたち「国際災害対策支援機構」はいろいろな活動をしています。わたしたちの機構では、ヘリコプターやドローンなどの空のインフラを使って新しいビジネスモデルを構築することで、「地域での自律的な防災力」が高まることを目的とした災害対策活動を展開しています。

先ほど阪井先生からご紹介があったように、わたしは子どものころにテレビで見た特撮SF人形劇『サンダーバード』から影響を受けて「国際災害対策支援機構」を立ち上げました。
わたしにとって『サンダーバード』の魅力は、タイトルにもなっているスーパーメカ「サンダーバード」を駆使した救助場面のカッコよさはもちろんですが、事故や災害で危機に陥った人々を救う「国際救助隊」のメンバーの使命感、仲間同士の絆など、彼らの生きざまにもありました。救助する者と救助される人々との間に生まれる葛藤や信頼といった人間模様も描かれていて、強く印象に残っています。
ですので、わたしが災害対策活動にかかわることになった原点には『サンダーバード』があるといっても言い過ぎではないと感じています。

さて、今回は、わたしたちの機構の取り組みの中から「神社de献血」という活動についてどのようなものなのかをお話しすることにします。
まず、この「神社de献血」という活動は、コロナ禍をきっかけに生まれました。
コロナウイルスがまん延してきた2020年ころ、わたしたちは日本赤十字社と、災害時にヘリコプターやドローンを使った物資や人員搬送について意見交換をおこなっていました。その意見交換のなかで、献血支援の必要性に気づいたのです。
コロナ禍では、医療崩壊についてよく耳にします。けれどそれ以前に、そもそも血液が行き渡らないと治療ができないという問題が見過ごされがちです。
たとえば、コロナの治療に使われるECMO（人工肺とポンプを用いた体外循環回路による治療）には、血液が必要です。
それにもかかわらず、相次ぐ自粛要請のために献血会場に人が集まらず、血液が集まらないという現状があるということを知りました。
コロナという未知のウイルスによって、多くの人々の命を支える献血事業が危機に瀕している。こういうときこそ、現代の日本における『サンダーバード』を志しているわたしたちの機構が行動すべきときだと感じました。
ただ、この場合の支援活動は、わたしたちの機構が普段おこなっているヘリコプターやドローンを駆使するアプローチとはちがったものになるだろうということは直感しました。
そこで、わたしたちの機構としては珍しく、空のインフラを用いない新たな事業を立ち上げることにしました。それが、今回お話しする「神社de献血」という事業です。
つまり、「神社de献血」というのは、コロナ禍で献血者をどうすれば増やせるかというところから生まれたアイデアなのです。

2.「神社」の持つ強みに注目

コロナ禍の医療現場で必要とされている血液が、献血会場に人が集まらないために不足している現状がある。そこで、わたしたちは、赤十字の支援に入ることにしました。

支援の方法を検討する際に、わたしたちが最初に考えたのは、あらゆる活動に自粛要請が出されているなかで、「どこであれば人がいるのか」ということです。
その結果、神社であれば、人がいるのではないかと気づいたのです。災害時であっても、多くの方はお祈りをしに神社に行くでしょうから。
実際に神社に行ってみると、神様にコロナが早く終息しますようにと願ったり、ご自身の健康を祈願したりと、コロナ禍でも神社に足を運ばれる方は少なくないことがわかりました。
わたしたち「国際災害対策支援機構」の評議員には、宮司の方もいらっしゃいます。そこで、評議員の宮司のみなさんと相談し、神社の境内を開放して献血会場にすることに取り組んでいこうとなりました。
そもそも神社は、人々が集うところであり、神様に心を寄せて祈る場所でもあります。神社を社会福祉の場として、献血を必要とされている方のお手伝いができればという目的を立てて、この活動がスタートしました。

3.「神社」×「スタンプ」の持つ魅力を手がかりに

せっかく神社の境内を開放して献血を呼びかけるので、ひとりでも多くの方に献血活動にご参加いただけるように工夫をしました。
そのひとつが「神社スタンプ」です。
これは、神社を参拝した証にいただける御朱印を、御朱印帳に集める方がいらっしゃるということからヒントを得たものです。御朱印帳と同様、神社巡りをして御朱印を集めるのが好きな「御朱印女子」と呼ばれる方々を主なターゲットにしました。
さすがに神社の御朱印そのものを発行することはできませんが、御朱印と同じように満足感を得られて、協力いただく神社の社名が入っていて、献血の記念になるようなスタンプを作ることにしました。
このアイデアは、ご協力いただいた神社から、社名の使用の承諾を得ることで実現しました。また、この「神社スタンプ」は、ご協力いただく神社ごとにデザインを変えました。それぞれの神社ごとに鳥居の形がちがうことを踏まえ、そのちがいをデザインに反映させたのです（これは、神社に祀られている神様がちがうことによるものだそうです）。そのため「神社スタンプ」にバージョンちがいが生まれました。
このような「神社スタンプ」を、ご協力いただいた各神社の境内の献血会場に置いて、ご来場いただいた方に、押していただくという形をとりました。

4. 10ヵ月で神社54社とつながる

では、この「神社de献血」が、現在どのように進んでいるかといいますと、2021年5月18日現在で37社の神社にご協力いただいております。
さらに、これから実施を予定している神社と、今後予定している神社を含めると、1都1府2県（東京都、大阪府、兵庫県、神奈川県）で合わせて20社くらい。つまり10ヵ月で54社とつながることができたのです。

Ⅲ.「神社de献血」実施までの流れ（松尾悦子）

1. 計画から実施まで

ここからは、実際にどのような形で、神社の境内で献血が実施されたかということに触れていきます。
「神社で献血」の活動がスタートしたのは、2020年の7月のこと。浅草神社からでした。現在（2021年5月18日）まだ1年が経っていない状況ですが、スタートしてから現在まで、この活動がどのような形で経過したのかについて、お話しします。

(1) まずは知り合いの宮司さんから

国際災害対策支援機構の評議員には、浅草神社の宮司さんがいます。
そこで、この活動を始めるにあたって彼に相談し、「では浅草神社からスタートしましょう」ということになりました。
「神社de献血」の活動をスタートする段階から、この活動を全国規模に広めていくことと、それと同時に、神社同士のつながりを広めていこうということを考えていました。ですので、当初は、神社の宮司さんから宮司さんへのご紹介という形で「神社de献血」の活動を広めていったのです。

(2) 開始早々驚きの展開へ

実際にスタートしてみると、開始1ヵ月後に「すごいな」と感じる出来事がありました。
宮司さんから宮司さんへは、スムーズに「数珠つなぎ」に紹介していただきました。浅草神社から始まってから3社目の太子堂八幡神社での実施の際に、それが起こりました。2020年8月6日のことです。
「神社de献血」の活動のために太子堂八幡神社に伺うと、宮司さんから「記念御朱印をお出ししましょう」というお申し出をいただいたのです。
急遽、その場で御朱印を作ってくださり、来場いただいたみなさまに無償でご朱印を発行していただくという形になりました。
確かに、この活動について検討している段階から「最終的には『神社スタンプ』ではなくて、記念御朱印が出せたらいいのにね」という声がありました。けれど、いきなり実施3社目という早い時期に、宮司さんのほうから記念御朱印を提案され、その場でつくっていただけるということは想定していませんでした。ですので、このことは特に強く印象に残っています。
その後も、宮司さんから宮司さんへと数珠つなぎの紹介がおこなわれ、順調に活動が実施されます。
2020年10月には、東京から離れた兵庫県でも実施することになりました。わたしたちの組織の評議員を務める兵庫県の播州三木大宮八幡宮の宮司さんから、「兵庫県でも輸血が必要な状況があるため、こちらでも実施しましょう」という声があったためです。

(3) 有償の御朱印帳の発行へ

さらに驚く出来事が続きます。
2020年12月には、「神社de献血」開催10社目となる東京豊島区の大鳥神社でおこなわれました。
その開催当日に、宮司さんから「記念御朱印を発行します」というお話をいただきます。これにもたいへん驚きました。「大鳥神社の御朱印は、これまで有償で出してきたため、有償という形で記念御朱印を出したい」とのことでした。
先ほどもお話ししましたように、わたしたちは、この活動をスタートさせるにあたって、いずれは神社で献血をした方に「献血記念御朱印」を出したい、と考えていました。ご協力いただいた神社に有償の献血御朱印を出していただくことを計画していたのです。
なぜ有償にしたかったかにも理由があります。
記念御朱印を有償で出すと売り上げが発生します。この売上の一部を、神社の「お気持ち」という形で寄付が可能となるためです。その寄付をわたしたちの機構が取りまとめ、赤十字に納めるという企画があったのです。赤十字の医療従事者に対して少しでも報いたかったのですね。

ただ、この企画の実施時期は、「神社de献血」の活動で実績を積んだあと、約1年後を考えていました。
ところが、「神社de献血」開始から5ヵ月しか経っていない10社目の大鳥神社で、宮司さんのほうから「記念御朱印を有償で出したい」というご提案をバーンと出していただきました。そして、その売り上げの一部は大鳥神社から赤十字に寄付されたのです。
まさに、わたしたちの企画を先取りしてくださったものだといえます。

じつは、このように有償の記念御朱印を出すことや、その売り上げの一部を赤十字に寄付することについては、のちに少し問題になりました。それは、神社の御朱印を「神社de献血」のような活動に用いることが良いのか、という問題です。
今後は、わたしたちも神社にかかわる方々のご意見を聞きながら、少しずつ考えを進めていきたいと考えています。
以上のように、わたしたちが「神社de献血」の活動を通じて、1年後に実現できれば……と考えていたことが、わずかの期間に段階的ではありますが、次々と実現しました。
なお、現在（2021年5月）は、この7月で「神社de献血」の活動が1年になりますので、この活動の1周年のご祝儀としての記念御朱印の発行の準備に入っていります。

（4）オリジナルのスタンプ帳の配付開始

年が明けて2021年1月に入ると、東京都赤十字血液センターと協働した「神社de献血」の活動が始まりました。
その際に、東京都赤十字血液センターの担当の方に、「神社de献血」をした方だけが押すオリジナルスタンプを集めることができる「スタンプ帳」を作っていただき、そのスタンプ帳をご協力いただいている各神社で配付するようになりました。

（5）メディアの力で一気に拡散

2021年の1月は、コロナ禍のため神社にお正月の参拝をするのは控えましょう、分散参拝しましょうという呼びかけがあったころです。
そのため、東京都心の神社に協力を求めることがなかなかできず、「神社de献血」の活動の場がなくなってしまいました。
そこで、都心から離れた周辺地域で献血会場になっていただく神社を探したところ、東京都府中市の大國魂神社や、西東京市の田無神社にご協力いただけることになりました。
そして、このふたつの神社での活動の様子が、コロナ禍におけるお正月の新たな取り組みとして、また、神社の新たなお正月の迎え方という切り口で、新聞やテレビ等のメディアに取り上げられたのです。
特に田無神社での活動の様子は、NHKの夕方のニュース番組の生中継で、大きく取り上げてくださいました。田無神社の参集殿をお借りして、そこにベッドを持ち込んで献血をおこなっているわたしたちの活動の様子が全国ネットで中継されたのです。
このことがきっかけとなり、「神社de献血」をより多くの方に知っていただくことができ、田無神社での献血の参加者も増加しました。

2. 実施後の環境変化と気づき

(1) 認知度の向上

2021年の正月明けに、再び緊急事態宣言が出され、自粛がさらに求められました。
そのため、企業内公共施設や駅前等で、献血バスを出せる場所が急激になくなり、献血による血液の供給が間に合わなくなりました。
その結果、手術が延期されるという事例が数多く見受けられるようになりました。治療に必要な献血血液を毎日必要とする、がんの治療を受けている方々などが治療を受けられない状況も増加しました。
そのような献血血液をめぐる切迫した状況を打開するため、急遽「神社de献血」の活動へのご協力をお願いしたのが、東京都八王子市の八幡八雲神社です。
急なお願いにもかかわらず引き受けてくださり、2021年1月29日に実施がかないました。

実は、献血というのは、2ヵ月ほど前から準備を必要とします。
たとえば広報活動にしても、2ヵ月間かけて、地域のみなさんに、個人だけでなく自治体を通じてお呼びかけをして周知をおこないます。
急遽の開催であった八幡八雲神社での「神社de献血」は、そういった丹念な周知ができず、準備期間の2日だけのSNSとWeb上での広報を命綱に実施したのです。しかし、結果として37名の方が参加してくださいました。この結果からわたしたちは大きな手ごたえを得ました。
つまり「神社de献血」という活動は、告知を事前に丹念にできなくても37名の方が献血に来てくださる、という手ごたえです。
「神社de献血」という活動の知名度が高まり、周知が広がってきている、ということ。そして、SNS等で短期間でも動員がかけられるようになってきているということ。これらが実証できたということでしょう。
なお、準備期間2日という急ごしらえでの実施は、あとにも先にも、この1回だけです。これ以降は、短くとも1ヵ月は周知の時間を取るようにしています。

(2) 日本赤十字社との連携の変化

2021年2月に入ると、「神社de献血」の開催会場が日本赤十字社の献血Web会員サービス「ラブラッド」(https://www.kenketsu.jp/)に登録され、Web予約が可能となりました。
当初、わたしたちの活動は、日本赤十字社でのWebでの献血予約システムの対象外になっていました。
それが「神社de献血」の活動が広がっていくにつれ、日本赤十字社の献血活動のWebサイトの予約システムを通じて利用できるようになったのです。
このことから、「神社de献血」の活動が、日本赤十字社の献血事業の定常的な活動のひとつになったと考えられます。
なお、最近、この日本赤十字社のWeb予約システムの偽サイトが現れました。みなさんご予約の際は日本赤十字社の公式ホームページからお願いします。

(3) 共催実施の実現

2021年2月21日には、東京都神道青年会との共催で「神社de献血」が実施されました。
この際にも、たいへんな驚きを感じることになりました。
わたしたちの組織は、それまで単独開催の形で神社の境内で献血活動を実施していました。しかし、将来的には、各神社とかかわりのある団体さんと、この活動を共催できればと考えてきました。

それが、またしても、このように早い時期に実現したのです。
東京都神道青年会との連携を模索しているうちに、青年会が年に一度おこなってきた献血活動を、共催という形で一緒におこなう運びになったのです。

（4）大阪府神社庁との組織的連携へ

2021年の2月末はたいへん忙しい時期でした。東京都神道青年会との共催の翌日2月22日には、大阪市の大阪天満宮で「神社de献血」が開催されました。
これは、この時期に東京で問題となっていた献血血液の不足が、大阪でも同じように起こっていたことが背景にあります。献血血液の不足を解消するため、大阪府神社庁と連携し実施に至ったのです。
大阪天満宮での「神社de献血」の実施は、わたしたちのこれまでの活動の流れに新しい道筋をもたらしました。
わたしたちのこれまでの活動は、ご協力いただいた神社の宮司さんから、次にご協力いただける神社の宮司さんをご紹介いただく「数珠つなぎ」のような形で、活動先を確保してきました。
ところが、この大阪天満宮での「神社de献血」はちがいました。どこかの神社の宮司さんに大阪天満宮の宮司さんのご紹介をいただいたわけではありません。

大阪天満宮での実施は大阪府神社庁が窓口となり、そこから大阪府下の神社に対して、わたしたちの活動の受け入れの要請をおこなってくださったことで実現しました。わたしたちの活動に、宮司さん同士のつながりの他に「神社庁との組織的連携」という新しい実施の道筋を得ることができたのです。
大阪府下のすべての神社が所属している神社庁を通じて開催した「神社de献血」は、東京都で実施したどの事例よりもスピード感をもって準備を進めることができました。

（5）悪天候をものともしない地域のつながり

2021年3月21日には、東京都世田谷区の駒繋神社で「神社de献血」が開催されました。
この日も、わたしたちの活動にとって大きな意味を感じる一日となりました。
実はこの日、東京は豪雨であり、わたしたちの活動以外の、戸外での他の献血会場はすべて閉鎖されてしまったのです。
ところが、わたしたちが開催した駒繋神社境内での「神社de献血」の受付数は47名にのぼり、東京都内では一番の献血数となったのでした。
この日は、激しい風も吹き、境内に設置した献血用のテントが飛んでしまうほどの豪雨でした。献血ルームなどの屋内の献血会場ではない、戸外で実施している献血会場はすべて閉鎖されました。しかし、駒繋神社の境内には、献血を待つ方々が傘をさしながら順番を待つ列ができていたのです。そのため、閉鎖はせずに実施を決行しました。
このことがきっかけとなり、わたしたちの「神社de献血」が、悪天候でも献血に人が訪れる取り組みとして、赤十字から改めて注目されるようになったのです。

駒繋神社での「神社de献血」の開催から実感したのは、わたしたちの活動が認められつつあるという手ごたえばかりではありません。地域のみなさんと神社との間には深いつながりがあるという実感も得ました。悪天候下での駒繋神社での実施によってそのことが証明されたという思いを強くしました。

（6）地域の方々との組織的連携へ

「地域のみなさんと神社との間には深いつながりがある」という手ごたえをさらに強くしたのは、翌月の2021年4月25日に開催された、素盞雄神社（すさのおじんじゃ）での「神社de献血」です。これは、南千住・三ノ輪十四ヶ町若睦連合会との共催でした。
神社にゆかりの深い氏子さんたちで形成されている町会との共同開催は、南千住・三ノ輪十四ヶ町若睦連合会に所属している素盞雄神社の宮司さんからのご提案でした。「素盞雄神社がお手本になりましょう」と、こちらからのご相談を形にしてくださったのです。
宮司さんのご尽力もあって連合会との共同開催という運びになり、わたしたちはいつもよりも大きな規模を想定した準備をおこないました。
このとき、神社からも70名ほどの献血の事前予約をいただきました。そこで、社務所でお借りする予定のベッド数を2台増やし、計6台のベッドで実施しました。ところが、開催当日には、事前予約をしていない一般の方が、さらに58名も足を運んでくださったのです。
そのため、献血終了予定の時刻が近づいても、まだ30数名の方をお待たせしている状態です。その方々には別の献血会場をご案内して、そちらに行っていただくことになりました。
つまり、この日は150名近い方が「神社de献血」に足を運んでくださったということになります。

この日、わたしたちは、以下のふたつのことから、「神社de献血」の活動に自信を得ることができました。
ひとつ目は、当日、一般の58名の方が足を運んでくださったことで、「神社de献血」の周知と広報がうまく機能していることが実証できたことです。
ふたつ目は、神社と、地元に根付いた氏子さんたちと深いつながりを持てたということです。つまり、氏子さんたちが所属している町会などの自治会との共催で実現できる、大きな可能性を確認できたのです。
今回の素盞雄神社の場合、地元に根付いた氏子さんたちがいらっしゃって、その氏子さんたちが所属している町会が25団体あるわけです。ですから、それらの町会とわたしたちが「神社de献血」を共催することで、たとえばそれぞれの町会から2名の氏子さんにご協力いただければ、それだけで50人前後の方々に参加いただけることになります。
ただ、この日の反省を踏まえると、今後は追加の参加者の数を考えておく必要はあります。事前予約が50名、一般の参加者が50名の場合は、合計100名になります。このように追加の参加者が増えそうなときには、ベッドが8台準備できるバス2台を手配することで、効率よく対応できるのではと考えるようになりました。

南千住・三ノ輪十四ヶ町若睦連合会との共催でおこなった「神社de献血」から得た気づきを踏まえて、わたしたちは次の3点を神社にご提案するようにしています。

1) 氏子さんたちの町会とわたしたちの機構が共催形式でおこなうことで、参加人数を事前に確保できること。
2) バスを用いることで多人数の参加者への献血環境を確保できること。
3) 2）によって、一般の参加者の方へも対応できること。

素盞雄神社の宮司さんからいただいたご提案が、このように、今後のわたしたちの活動におけるひとつのモデルケースになりました。

（7）3つの新しい成果

2022年5月9日には、神奈川県で初めての「神社de献血」が若宮八幡宮で実施されました。こちらの事例には3つの点で新しさがありました。
これまでは、実施実績のある神社の宮司さんから次にご協力いただける神社の宮司さんを紹介いただく形で展開されてきました。
しかし、若宮八幡宮の場合は、先方の宮司さんからご連絡をいただいたのです。
若宮八幡宮の宮司さんが手を挙げてくださったことによって、紹介ではなく神社の自主的な発信による「神社de献血」の流れが生まれました。
これがひとつ目の新しい点です。
この若宮八幡宮の宮司さんは、かなり積極的でした。わたしたちが「これまで、献血記念御朱印を無償で発行した実績があります」というお話をさせていただいたところ、即座に「ではこちらでは、無償の血液型別献血記念御朱印を発行するだけでなく、それとは別に、献血できなくても趣旨に賛同いただいた方が参加できるように、有償で血液型別の献血記念御朱印を発行します」とおっしゃったのです。
この点がふたつ目の新しさです。
これも驚くべき話です。実は、わたしたちの将来的な構想の中に、「血液型別」で何かしたい、というキーワードがありましたが、当時はまだ、その実行段階ではないと考えていたからです。
赤十字の献血センターには、「A型ちゃん」「B型ちゃん」「O型ちゃん」「AB型ちゃん」という4種類のキャラクターからなる「献血ちゃん」というマスコットがいます。それを、献血記念スタンプに組み込んで、献血にご協力いただいた方に、ご自分の血液型のスタンプを押していただくといいなと考えていました。
ところがこのアイデアも、宮司さんが先取りされて実施が実現したのです。
このような経緯で、神奈川県で初めての「神社de献血」の開催となった若宮八幡宮では、献血記念御朱印を無償で発行いただくと同時に、有償での血液型別献血記念御朱印が発行されました。
なお、こちらの若宮八幡宮では、先ほどお話しした素盞雄神社と同じく、氏子である地域のみなさんにご協力をいただいて予約を進めていただきました。
さらに、氏子である商店街の企業さんから、協賛商品が続々と集まりました。このことで、若宮八幡宮で「神社de献血」をいただいた方々には、ご当地企業の協賛品を配付できたのです。
これが3つ目の新しさです。

以上のように、若宮八幡宮での実施では、宮司さんからの「自主的参画」の申し出と、「血液型別献血記念御朱印」の登場、地元企業からの「協賛品」の配付、という新しい成果に結びつきました。

（8）宮司さん方のご提案で、当初の構想がほぼ実現

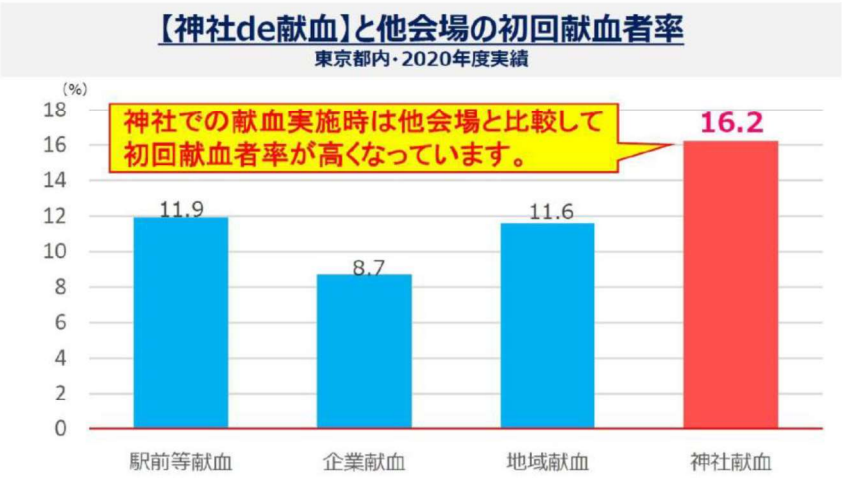
2020年7月から現在（2021年5月）までの10ヵ月間は、驚きの連続でした。
わたしたちが当初考えていた「神社でこういう形で献血ができたらいいな」という構想が、神社の宮司さんを中心とする関係の方々からの自主的な提案で、すべて実現できてしまったからです。
今後は、善意の「数珠つなぎ」とも言える「神社de献血」の驚くべき10ヵ月の活動について、きちんと見直して、ルールづくりをおこない、神社の関係者のみなさんや地域の方々にご迷惑のかからないような形をめざします。また、神社を主軸とした新たな「記念献血」の枠組みをつくっていこうと計画しています。

Ⅳ. 実現させるポイント(松尾悦子)

1. 神社で献血をおこなうということ

わたしたちの「神社de献血」の活動のよいところは、「神社」での開催だからこそのよさとつながっています。
神社は、近所にあれば「ちょっと立ち寄ろう」と、地域の方であれば足を運びやすい場所です。
「ちょっと神様にご挨拶しよう」というのもあるでしょうし、何かを神様にお願いしに行く、お祈りしに行くという場所でもあると思います。
そういった形で、近所の方が度々立ち寄ることができる場所、何の気兼ねもなく立ち寄ることができる場所として、地域に根付いているところが神社のよさです。

他の献血会場と比べて、わたしたちの「神社de献血」の何がちがうのかというと、「今回初めて献血します」という方が多い点です。
このちがいは、神社が「ちょっと立ち寄りやすい」「地域に根付いた心が安らぐ場所」だからこそ生み出されていると考えています。
次のグラフ(スライド7枚目)は、2020年度実施についてまとめたもので、初めて献血をした方の比率を場所ごとに比較しています。このデータによると、神社では、他の会場よりも初めて献血をされた方の比率が多いことがわかります。
2020年度7月から、2020年の12月までの数値で、このような結果となっていますので、2021年度は、もっと数値が上がっていると予想されます。

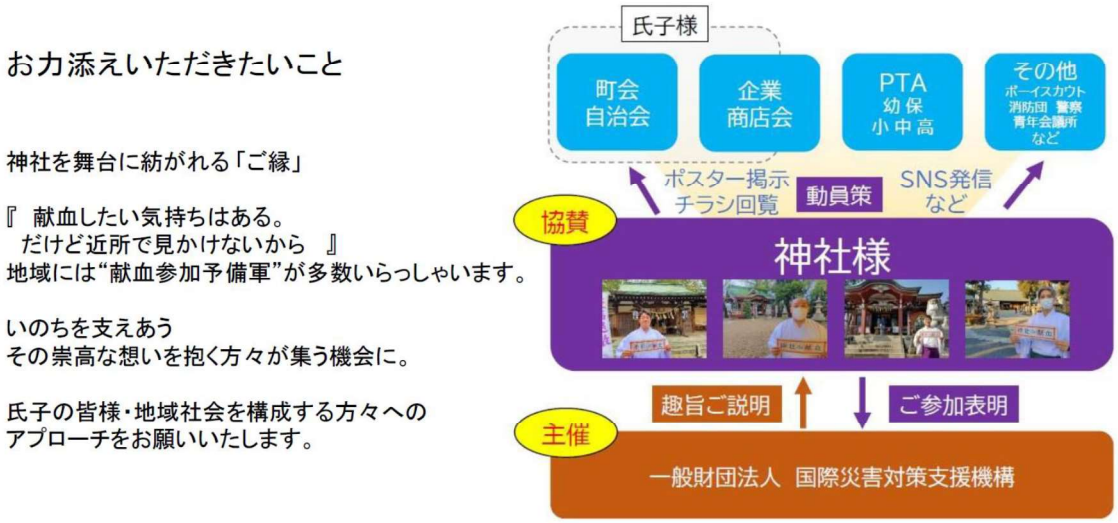


資料　スライド7

2. 実施の工夫

(1)「お力添えいただきたいこと」の明示

これは、「神社de献血」を実施するにあたって、わたしたちが神社の関係者のみなさんにどのようなお願いをしているかについて示した資料(資料　スライド9)になります。
企業でいうところの「営業ツール」にあたり、神社を舞台に紡がれる「ご縁」や地域の方たちとのつながりを通じて、献血参加予備軍の方に対してアプローチしていただきたいとお伝えしています。



資料 スライド9

わたしたちが、神社にお力添えいただきたいことがこの図でわかるようにしています。宮司さんをはじめとする神社の方々に、どういった形でご協力いただきたいのか、どのような言葉で氏子や地域の方々にお声がけいただきたいか、この資料を使って説明させていただいています。

（2）まずはオフライン告知

「神社de献血」を広げるには、まずはオフラインでの告知から始めます。具体的にはポスターの掲示やチラシの回覧などをおこないます。
神社には、氏子さんがいて、町内会さんだけでなく企業さんの場合もあります。基本的には、その方々に向けたポスターの掲示やチラシの回覧などをしています。
他には、町内会の会長さん、大きな企業さん、商店街会長さんといった、特に神社とゆかりの強いところの窓口を紹介いただき、その窓口を通じて、「神社de献血」に参加いただけるよう、地域のみなさんに知っていただくようにしています。

（3）オフライン告知のコツ

氏子さんに広めるのとは別に、オフラインで告知をするには、神社の周辺にある幼稚園や、小・中・高等学校にポスターの掲示やチラシの配布をおこないます。特に、神社の周辺にある小学校ではかなり力を入れており、小学生に直接チラシの配布をしています。
なぜこれが効率的かというと、子どもたちは、学校で配付されたものを親御さんに渡す習慣があるので、小学生を「伝書鳩」のように活用しているということです（笑）。同時に、自分たちの地域の神社が献血活動の場になっているということを、子どもたちに周知することにもなります。

（4）神社における意思決定機関とは

神社における意思決定はどこでおこなわれているのかというと、それは神社によってさまざまです。宮司さんがひとりで決められる場合もあれば、機関として判断している場合もあります。
機関としての意思決定については、以下の2種類が挙げられます。

- 宗教法人（法人格）としての場合、代表役員（宮司）と責任役員（神社によって人数は変動）による責任役員会で決定がおこなわれます。
- 純粋に信仰の場たる神社としては、宮司とその神社の総代たち（総代会）によって決定されます。ただし、運営上の責任役員会に上程して諮問する場合があります。

協議内容やその神社の管理体制によって固有の意思決定の形があるため、神社の宮司さんの責任で実施される場合もあれば、宗教法人として責任役員会にはかったり、また地域の氏子の代表者である総代さんたちと相談されたりする場合もあります。
このように、さまざまな方法によって意思決定がおこなわれていますが、ひとつの神社でひとつの事業を実施するためには、その護持運営に携わっている多くの方のご理解やご協力が必要となるのです。
こういった過程を経て、「神社de献血」は実施されています。

3. 赤十字とのかかわり

（1）赤十字とわたしたちの活動のちがい

わたしたちには、先ほどお話ししたような、地域の方々と神社とのつながりが見えません。ですので、神社との打ち合わせの際には、地域の方々と神社とのつながりについて伺うようにしています。
具体的には、どこに何をお尋ねすればよいのかということや、どのような協力を求めることができるのか、といったことです。
わたしたちの活動は、神社と氏子さん方とつながりを持てたからこそ、地域に密着した活動が可能になりました。赤十字とわたしたちの活動のちがいはここにあります。
赤十字の活動では、献血についての告知は、チラシをポスティングしたり、街頭でチラシを配布したり、ポスターを貼らせていただくお願いをする程度です。チラシ配布やポスター掲示に関するリサーチも積極的におこなっていません。
わたしたちは神社とつながりをもたせていただくことで、神社にかかわるみなさんから、地域についての詳しいお話を聞くことができます。
これがなければ、「神社de献血」のチラシの効果的な配布方法やポスター掲示のお願いを、どこのどの窓口に持っていけばよいのかわかりませんものね。
このような地域に密着したリサーチ活動に差があるといえるでしょう。

（2）神社と赤十字の間に立ち実施をサポート

わたしたちは、神社の関係者のみなさんから地域の状況やリサーチ情報を事前に伺って整理をし、そのノウハウを赤十字に提供しています。
つまり、神社と赤十字の間に立って、「実施の知恵」についての橋渡しをさせていただいているというイメージです。
わたしたちは、神社と赤十字との間を取り持つ形で「神社de献血」を実施させていただいているのです。

（3）全国展開のためにチラシのデザインの統一

次のスライド（資料　スライド10-1）を参照してください。これは地域の方に神社からどのように献血について広めていただくかをご案内した「営業資料」です。

「神社de献血」をおこなうにあたって、わたしたちは神社に「こういったものをご提供できますよ」という形でこの営業ツール一覧をお見せしています。
この一覧のなかでも、チラシは、献血会のご周知ツールの中心であるといえます。
ですので、チラシについて少し工夫をしました。それは、どこでどのような形式で実施するとしても、チラシのデザインを統一したことです。

実は、実施当初は、赤十字の担当者の方がチラシの制作をおこなっていました。赤十字の担当の方は実施会場ごとに異なります。そのため、チラシは担当の方がそれぞれの考えで独自のものをつくられるため、クオリテイも見せ方もさまざまでした。

そこで、「神社de献血」を全国規模で展開していくにあたって、チラシのデザインを統一したいということを赤十字に提案したのです。

現在では、すべての実施会場のチラシは、わたしたちがお願いしているデザイナーにつくっていただいています。ご当地の名物や神社固有のアイコンを取り入れつつ、統一のデザインを基調としたチラシとなっています。
ご当地や神社の特色をおさえつつも統一されたデザインのチラシを、地域で回覧していただいたり、神社に参拝される方に配布していただいたりと、さまざまにご活用いただいている状況です。
最近ではSNSを上手く活用する神社もたくさんありますので、SNSへ掲載いただいてもいます。「神社de献血」がさまざまな形で発信される現状を考えると、チラシの基調となるデザインを統一したからこそ伝えられるメッセージがあると感じています。

資料　スライド10-1

（4）オリジナルのスタンプ帳が広げた、地域のみなさんのかかわりかた

「神社de献血」の記念品について少し触れておきます。
現在、東京都赤十字血液センターに「神社de献血」のオリジナルスタンプ帳というのを作っていただいており（資料　スライド10－2参照）、献血にご協力いただいた方には、この東京都オリジナルのスタンプ帳を来場記念にお渡しします。

神社のスタンプを集められるスタンプ帳ですので、「神社de献血」に限らず神社を訪れてスタンプを押して楽しんでいただくこともできるようになりました。
そのため最近では、「神社de献血」の受付に、家族のスタンプ帳を4冊ほど持ったお父さんが来られて、「前回〇〇神社で献血したので今回は協力できないのですが、スタンプだけいただきます」という事例も出てきました。

今では、神奈川県の赤十字にスタンプ帳の発行を協議していただいています（神奈川県、2021年10月31日配付開始）。現在、「神社de献血」はこのように進んでいます。
ありがとうございました。

（講義部分終了）

献血会の記念品について

★オリジナルスタンプ帳（都内共通）

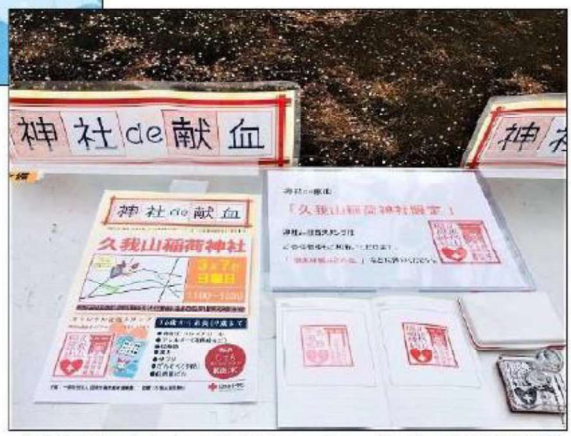
★東京都赤十字血液センター作成

★献血できた方へもれなく進呈

★使用方法に制限は設けていません

★御朱印帳と別にお持ちになり
献血記念のスタンプ集めを楽しむ
常連様も出てきています

★幅10.5cm×高さ14.8cm



会場に設置されたスタンプコーナー（久我山稲荷神社様）

資料　スライド10－2

Ⅴ. 松尾悦子氏への21の質問
（松尾悦子×阪井和男×明治大学法学部自由講座受講生）

Q1:なぜ神社なのか？

東京都内の統計で施設数を見ると、神社が1,451社、お寺が2,876寺、キリスト教会が2,342件なので神社に比べると寺院やキリスト教の教会の方が施設数的には多いようです。なぜ神社なのですか？
たとえば、キリスト教会だと、神社よりも数が多いし、キリスト教の特色である「隣人愛」に訴えかけると献血してもらいやすいように思うのですが。

A1：支援内容に「適した場」が神社だったから

「神社de献血」で神社を実施会場に選んだのは、神社がそういった場所に適しているという理由です。具体的には境内や、献血に適した建物（社務所）があることです。そういった場や施設を活用できることがメリットであるととらえたので、神社に特化したものにしました。
今回の「神社de献血」は、赤十字が抱えている医療現場の課題についての支援です。献血者数の減少という状況を起点にして考えました。
われわれの機構では、「そこに適したもの」の支援をおこなうというスタイルで取り組んでいます。ですので、今回は神社を選んだのです。
なお、われわれの機構では、お寺への支援については、別の企画として進めています。この取り組みは献血ではありませんが、それはまた別の機会にお話しします。

Q2：来場者はどんな人？

献血会場に来場する人の主な年齢層はありますか？　また、この年齢層にもっと来てほしいという要望はありますか？

A2：ミドルエイジの「御朱印女子」が中心

ひとつ目の質問に関してですが、われわれの「神社de献血」に来場される方の年齢層は40代、50代が中心です。
これは「神社de献血」の特徴です。「神社de献血」を始めるにあたって、ターゲットとした層がそこです。つまり、「御朱印を集めている女性」にターゲットを絞った取り組みが「神社de献血」なのです。
ターゲットである御朱印女子の方々の多くは40代、50代です。その方たちに響くように「神社de献血」ではさまざまな工夫を全力投球でこらしています。来場者の主な年齢層の特徴は、その結果だと考えています。

ふたつ目の質問に関しては、もっと若い方に広げたいですね。御朱印女子の中には20代の方もいらっしゃるので、次は20代の若い方々を全力で勧誘していきたいと考えています。

Q3:地方での実施は考えているか？

現在は、東京、大阪、神奈川、兵庫というような人口の多い府県で実施されていますが、地方での実施は進める予定でしょうか？

A3：そもそもの目的が東京・大阪の輸血血液の不足の解決にある

この質問について回答する前に、背景を説明しておきます。
献血による輸血血液の必要量は、地域によって異なります。たとえば、東京都で1日に使用する血液量は、鹿児島県で使用する血液量の1ヵ月分と同じです。
つまり、東京都はそれだけの血液が必要だという現状があります。
これは、東京都には大きな病院が多く、専門医が多いため、手術の実施が東京都に集中していることによるものです。そのため、輸血血液の不足が緊急の課題になったのは東京都です。大阪府も同じ状況にあります。このふたつの府県の血液供給が行き詰まっていることが、わたしたちが支援すべき課題だったのです。

また、これまでは、このふたつの府県から周辺の地方都市に血液が供給されていましたが、現在はその状況が逆転するほど、東京都と大阪府には、輸血用の血液が不足しています。
しかもコロナ禍であるため、どの自治体も自分たちが必要とする血液の確保を最優先に考えざるをえなくなり、東京都内や大阪府内に血液の提供をする余裕がなくなることも予想に難くありません。
このような状況を知っていただいた上で、ご質問いただいた「神社de献血」を今後、全国に広めていくかどうかということについてお答えします。

つまり、輸血血液について、究極に困っているのは東京都と大阪府です。その血液供給の一端を担うというのが今回の「神社de献血」の使命なのです。
ですから、われわれの「神社de献血」の活動は、東京都と大阪府で重点的に実施することを念頭に活動している、というのが答えになります。

では、兵庫県と神奈川県ではなぜ実施したのかというという疑問をお持ちかもしれません。
この2県に関しては、先ほどもお話ししたように神社から「わたしたちもお手伝いします。地元に対して貢献したい」という申し出をいただいたためです。
ただ、現在は、東京、大阪、神奈川、兵庫というような人口の多い府県で実施されていますが、少子高齢化が進むなか地方での要望があるため実施を進める予定ですし、そういった地方の神社から、「わたしたちも「神社de献血」にご協力したい」という申し出があれば、その神社の県の献血センターさんと連携をおこなって実施するという形をとるつもりです。

Q4:実施場所によるちがいはあるか？

東京以外の地域で実施する場合の難しさはありますか？

A4：地域の外的環境と「人」に左右される

特にありません。ただ、地域によって献血をめぐる状況がまったくちがうことはあります。

コロナ禍では、それぞれの地域がおかれている状況にちがいがあります。そしてそれ以上に、担当者によるちがいが非常に大きくかかわってきます。
神奈川県の場合を例に挙げるとよくわかります。神奈川県は、緊急事態宣言を免れているので、献血車や献血ルーム周辺の人通りは、それなりにあります。そのため、輸血血液の供給が少ないとは言いつつも、実は、例年程度の献血者数が保たれている状態です。
他の緊急事態宣言が発出されていない県も似たような状況です。
そのような状況下では、県の血液センターの職員さんたちは、新しいことにチャレンジしてまで献血者数を伸ばそうとする方は少ないでしょう。新しい取り組みをおこなって実績を上げようということは、あまりなさらない組織文化もあるかもしれません。
ところが、そんななかであっても、志のある担当の職員の方がいらっしゃった場合は、「うちはやります」ということが起こったりします。
神奈川県の場合、そういった前向きな職員の方が担当者だったので、現在、神奈川県下の5社の神社と「神社de献血」実施についての話が進んでいます。

Q5: 実施を左右するのは「人しだい」か？

実施は、運営にかかわる「人」に左右されるということでしょうか？

A5：ひとりでは不足で、かかわる双方に「人」が必要

そうですね。
ただ、この「神社de献血」の取り組みは、神社が「前のめり」になるだけでも駄目です。
献血はそもそも赤十字が実施するものなので、各都道府県の血液センターも「前のめり」になっていただかないと、「神社de献血」の実施はできないのです。
もちろん逆の場合も同じです。
このことは常に、神社にかかわる方々と、各都道府県の血液センターの職員さんの双方にお伝えしています。
「神社de献血」は、双方が「前のめり」にならなければ実施できない。神社にかかわる方々の思いだけでは実現しないのです。

Q6：活動の際に心がけている姿勢は？

神社と赤十字の間に立つ際に、気をつけていることはありますか？

A6：「4つの言葉」を口にしない

わたしたちは「お願いします」「実施しましょう」「お手伝いください」「助けてください」といった言葉を一切言わないようにしています。なぜなら神社の方には、「自分ごと」で考えていただくことが大切だと考えているからです。
ボランティアをする際にこういうことを心がけている人はあまりいないと思います。

そういう意味では、わたしたちは、日本で一般的に考えられている「ボランティア」の姿勢で取り組んでいないのかもしれません。

Q7：異質な組織同士の連携を実現するには？

コメントと質問があります。まずはコメントから。
「神社de献血」の活動では、縦割り意識の強い組織（赤十字、神社）と国際災害対策支援機構が連携するだけでなく、機構が間に立つことで、縦割り意識の強い組織同士の連携や、縦割り意識の強い組織の内部のスタッフ同士の連携も支援されているのですよね。
また、神社関連では地域の氏子さんの団体や青年会などステークホルダーが複雑に入り組んでいますよね。それらのすべてにきれいに横串を通して、しかもこの短期間の間に実施されたということに驚きを感じています。
先ほど、小学校でチラシを配布するとおっしゃっていたので、教育委員会ともかかわられたということですよね。驚きです。
次に質問です。
このような異質で連携経験のない複数の組織の連携を実現する場合には、何が必要なのでしょうか？

A7：腹をくくること、そして腹をくくらせること

確かに、この活動は多くの縦割り意識の強い組織とかかわっています。
赤十字は、日本政府とは独立していますが、厚生労働省の管轄になります。厚労省の管轄に日本赤十字社があって、9つの事業を扱っています。そのうちのひとつが、血液事業です。
そして、神社は神社庁管轄です。
この「神社de献血」の活動は、そういう意味では厚生労働省と神社庁の横串を通しているといえるかもしれません。
また、各都道府県の血液センターは、国家公務員の所属する官公庁とほぼ同じ組織立てになっているので、縦割り意識の強い組織です。
あらためて考えてみると、「神社de献血」の取り組みを通じて、各都府県の血液センター間で、お互いのよいところを取り入れあって「神社de献血」の活動をバージョンアップしていく動きがありますが、これは横串を通すことになっているかもしれません。

小学校でのチラシの配布については、おっしゃる通り、教育委員会を通しました。
改めて考えると、「神社de献血」の活動には、神社庁と日本赤十字社をはじめ、厚生労働省、文部科学省、経済産業省がかかわっています。
神社庁と日本赤十字社という大きな組織を中心にして、そこに、厚労省、文科省、経産省という国の3つの機関が連携しているということですね。これは、相当におもしろいことだと感じています。
これだけ縦割り意識の強い組織が複雑に入り組んでいるわけですから、当然、一筋縄では行きません。その混沌とした仕組みの中をすりぬけながら、必要なことだけを交渉して通していくわけですから、本当におもしろいのです。

さて、ご質問についてです。
連携に必要なものは結局、交渉力だと考えています。
そして、「本当にこれ(『神社de献血』)をするのかしないのか」といった点において、「大人も腹をくくらないといけない」、つまり、われわれも含めて関係者がみな腹をくくること（時には腹をくくらせること）が重要だと考えています。

Q8：実施の上で欠かせないことは？

異なるコミュニティの連携につきものの困難を乗り越えて実施されている「神社de献血」ですが、実施上欠かせないことについて何かひとつ教えてください。

A8：具体的な段取りを提示し、その実行を厳格に求めること

担当者の方には、事前に「この段取りでこのようにおこなってほしい」ということを、具体的にお伝えしています。
同時に、「この通りにおこなってくださらないのであれば、実施いたしません」とはっきりお伝えしています。
「こちらからお伝えしたことを、各方面に通してくださらなかったりおこなわなかったりした場合、次の実施はありません」と明確に示すことで、われわれも先方も腹をくくることにつながると思います。

Q9：「神社de献血」の準備期間は？

初回実施までの準備期間は、どのくらいでしたか？

A9：2ヵ月

通常は2ヵ月です。「実施しましょう」と宣言してから、2ヵ月で準備を整えました。

Q10：ベンチャービジネスとの共通点は？

松尾さんの段取り力がすごいなという点と、うまくいかなくても当たり前と思ってやっている姿勢がすごいなと感じました。ベンチャービジネスと同じだと感じました。

A10：「綿密な段取りの重視」「うまくいかないのが当然という考え方」が共通しているかも

立ち上げにあたっての段取りという点では、毎日5社程度の神社に電話をします。かかわっている神社の担当の方に、日をあけず、途切れることなく電話をかけることが、ポイントかもしれません。
機構の活動が、「ベンチャービジネス」だと言われると、そうかもしれません。「綿密な段取りの重視」「うまくいかないのが当然という考え方」は、新しくビジネスをする際には共通しているかもしれませんね。

Q11：「神社de献血」を通じて得た交渉の技はあるか？

今回の「神社de献血」を通して得た、交渉の際の技のようなものはありますか？

A11：「神様がお決めになることなので」と言って委ねる

はい、今回は神社がかかわる取り組みなので、交渉の場で「神様がお決めになることなので」と言って神社に委ねる、ということを学びました。

この言い回しを使って交渉に臨むと、かなり割り切って進められます（笑）。
実はこの言い回しは、神社とのお付き合いのなかで覚えたものです。何社もの神社に足を運ぶものの、断られ続けるなかで、どのような「言葉」を使えばいいのかということを学びました。

Q12：実施状況の公開の合意形成はどのようにおこなった？

質問が2点あります。
実施状況（来場者数など）の記録を閲覧することはできますか。また、その記録を公開しているならば、記録の公開について関係者から合意を得るのは難しかったのではないでしょうか？

A12：「実施報告が必要です」と伝える

まずは、ひとつ目の質問についてです。
実施状況の記録については、一般財団法人国際災害対策支援機構のホームページに掲載されているため、閲覧が可能です（https://www.unglobal.org/jinja-bd/ <2023年7月17日アクセス>）。
ホームページには、どの神社でいつ実施し、どのくらいの来場者数があったかについて記載しています。実施状況をホームページに記載することについて、神社の宮司さんたちにとっては、刺激になっているようです。
宮司さん同士が平素から親しくされていることもあって、互いに来場者数を確認しあうことで実施の励みにされていると聞きます。「あそこの神社には負けられない」という感じでご覧になっているようです。

ふたつ目の質問についてです。
合意を得るために何かしたということはありません。「こういった類の活動には実施報告が必要だ」ということをお伝えして、公開しました。そもそも「神社de献血」の主催はわれわれの機構ですので。

Q13：来場者数の変遷が
イノベーションの普及と通じるのでは？

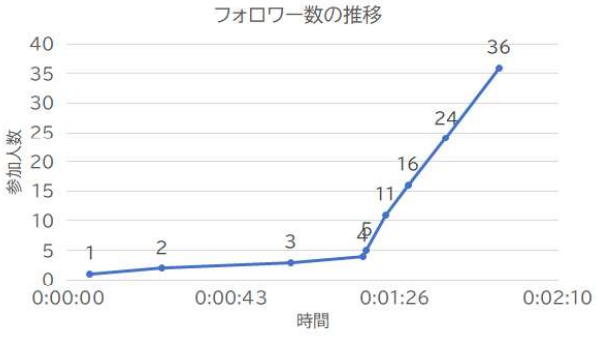


図1. 初期の浸透曲線

実施状況についての詳細なデータはありませんか？
実は、来場者数の変遷を見ていると、図1に示すようなムーブメントやイノベーションが普及するときの普及カーブに似ているなという感じを受けました。しばらく伸び悩む時期を経てザーッと広がっていくといった点です。そういう見地から、もう少し詳細なデータがあれば、たとえば、時系列での解析が可能ではないかと考えたのです。いかがでしょうか？

A13：時系列での解析が必要

公開していませんが、赤十字から提供されたデータがそれにあたるかと思います。公開しているのは、受付をすませた来場者の人数ですが、赤十字から提供されたデータは、性別や年齢層などより詳細なデータです。

時系列で解析してみると何か見えてくるかもしれません。ぜひ、お願いします。

Q13[付記1](阪井和男)

Q13の図1は、3分あまりの動画「裸の男とリーダーシップ」(田辺大, 「日本が変わるスイッチが入っている映像 - 裸の男とリーダーシップ」(3'16"), 2010年4月27日公開. https://www.youtube.com/watch?v=OVfSaoT9mEM <2023年7月15日アクセス>)において、リーダーシップを発揮してフォロワーを作り、ムーブメントが起こるプロセスをフォロワー数の推移として示したものです。

この曲線は、全体としてみると、フォロワー数をy、秒数をtとおくと、$y = 0.6658 \times e^{2773t}$という指数関数で表すことができます。つまり、全体としては時間とともに指数関数的にフォロワー数が増大しているわけです(ここで、決定係数は0.9386とデータの94%がこの式で説明できます)。

ところが、立ち上がりのフォロワー数4人までを見ると、$y = 140.74 \times t^{0.5187}$で表されます。秒数$t$の指数がほぼ0.5ですから$\sqrt{t}$にほぼ等しいわけです。つまり、立ち上がりはなかなか増えないルート的な立ち上がりの時期が続いているのです。これはムーブメントやイノベーションの立ち上がりがなかなか起きない「種火」の段階といえます。言い換えれば、成果が見えるように発展する「成長期」の前にある「持続期」に相当しているわけです。このようにムーブメントやイノベーションの立ち上がりに構造があるということは、3つの異なるプロセス:(1)種火を熾(おこ)す「行為」が生まれる「発火点」、(2)種火を灯(とも)す「行為」をし続ける「持続期」、(3)種火が燃え広がり「普及」へと展開を見せる「成長期」――があり、これらが交差することを示しているのではないでしょうか。

なお、動画のオリジナル版は、こちらです(Derek Sivers, "First Follower: Leadership Lessons from a Dancing Guy", 2010-02-11. https://sivers.org/ff 〈2023年7月17日アクセス〉)。

Q13[付記2](阪井和男)

その後の実施状況については、2020年7月5日から2021年7月25日までの1年強(385日間)で39回実施され、延べ1,687人の受け付け(献血数)がありました。9.9日に1回は実施されている計算になり、採血数を1回あたりに直すと43.3人となります。

9.9日に1回の実施というのはかなりの頻度です。初回の浅草神社から第2回の瀬田玉川神社までに要した日数は14日、それから第3回の太子堂八幡神社までは49日、次の松陰神社までは21日、亀戸天神社までが28日でしたので、その後は実施する神社が急速に広まりを見せており、実施するたびに開催間隔の日数が小さくなってきたことがわかります。これを次の図2に示します。

図2のデータ点に回帰直線を引くと、大きくバラついていますが、右下がりの直線になります。その傾きから、開催するたびに0.33日だけ実施間隔が少なくなっていることがわかります(決定係数は0.14)。

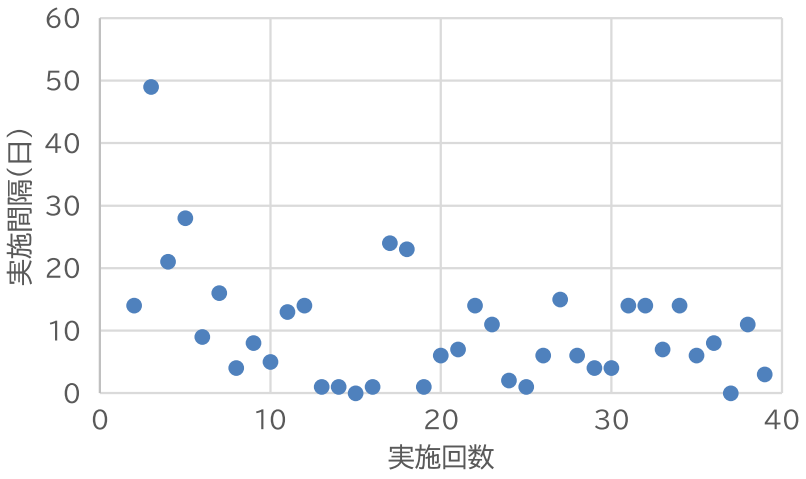


図2. 実施頻度の推移

次に、採血数を累積したものを開始日からの日数に対して図示したのが次の図3です。

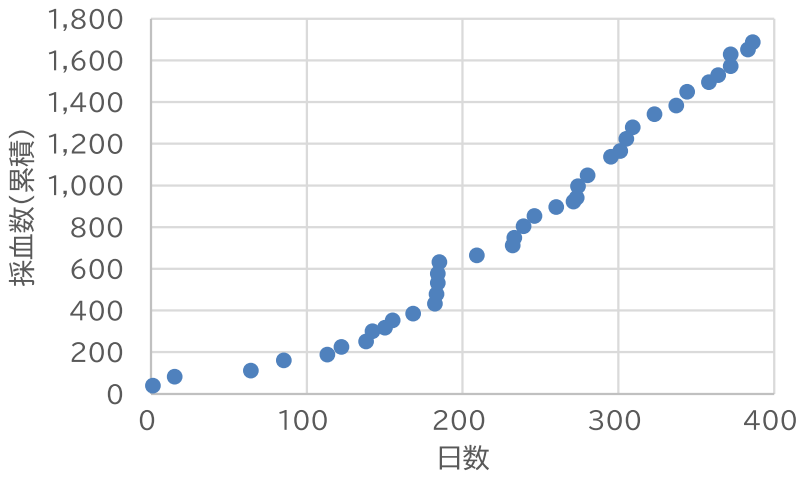


図3. 採血者数の推移

この図からわかることは、立ち上がりの持続期間が明瞭には見えていないことです。つまり、「裸の男」の踊りが伝搬していったときのように、抑制的で持続的な立ち上がりの期間や急激な成長期間にあたる増大が見られません。実際、献血の受付人数をy、実施日をtとおくと、$y = 0.0083 \times t^2 + 1.2874 \times t - 6.7631$と、2次式になります。このとき、決定係数はなんと0.99となりデータの99%がこの曲線で説明できてしまうことになるのです。このことから、ムーブメントが伝搬するメカニズムが当初考えたものと異なることがわかります。

Q14：なぜこのような活動を始めたのか？

そもそも、松尾さんはなぜこのような活動に取り組んでいらっしゃるのでしょうか？

A14：与えられた役割だと思うから

たぶん、神様などに与えられた役割を果たしているだけなので、わたしがこの活動を「やりたい」と思っているのではなく、その場その場でやっているだけです。
なぜ、自分がこのようなことをしているのか、よくわからないのです。「やりたいこと」というわけではなく、与えられた役割なのだと思います。

Q15：事業のスタート地点にある発想はあるか？

「神社de献血」は、国際災害対策支援機構の取り組みのうちの「寺社活用文化向上支援事業」の一環としておこなわれているということですが、「神社de献血」を含め、この事業のスタート地点になった発想のようなものはあるでしょうか？

A15：神社と寺院は災害に強い場所に建てられているということ

はい、あります。日本では（歴史的経緯から）、神社と寺院というのは、災害に強い場所に建てられている。だから、その場を災害対策の拠点として考える、ということです。これがわれわれの取り組みの根底にあります。
そして、その前提を踏まえて、「では、われわれが今、この時代のなかで何ができるのか」と考えを進めます。

たとえば、現在はコロナ禍ですね。このようななかで、われわれができることは何か。すると、東京・大阪の輸血血液の不足という差し迫った問題を抱える、赤十字の献血事業に考えが至ったわけです。そして「神社de献血」という形になりました。

Q16：災害の支援に焦点を絞っているのはなぜ？

松尾さんの取り組みは、「災害の支援」に焦点を絞っているように感じました。では、そのように考えるようになられたきっかけは、どのようなところにあったのでしょうか？

A16：震災復興の体制づくりを見た経験と支援物資搬送窓口での経験から

ふたつの震災での経験がきっかけです。
ひとつは阪神・淡路大震災での経験です。この震災では、自分自身が被災し、その復興事業にたずさわりました。
もう少し詳しく説明すると、当時、復興の現場にいたわたしは、復興のための体制づくりを見ていて、どのような体制がよいのか、どのような体制ではだめなのか、というのを考えました。

もうひとつは、東日本大震災での経験です。この時は、わたしはすでに事業をおこなっていて日本商工会議所に所属していたので、支援のための物資搬送の窓口をしていました。このときの経験も影響しています。

Q17：機構の立ち上げのきっかけは？

松尾さんが、一般財団法人国際災害対策支援機構を立ち上げるきっかけは、どのようなところにあったのでしょうか？

A17：日本のボランティアの在り方への違和感があったため

ふたつあります。
まず、わたしは27歳のときに起業して、その後10年間いろいろなことに従事し、企業にさまざまなノウハウを提供してきました。新規事業の立ち上げ時などには、ノウハウの提供だけではなく、企業への支援もおこないました。
ただ、財団の設立にたずさわったことはありませんでした。だから、「財団をつくったことがないから、つくってみよう」と考えたんです。そこが、まずひとつ目のきっかけになっています。

次に、「災害の支援」がわたしの根底にはあるのですが、一般的に考えられている「ボランティア」というのが、どうもうまく自分自身の中に入ってこない、というのがありました。
どういうことかというと、海外におけるボランティアと比較してですが、日本のボランティアというのが、「ちょっと、ちがうな」と感じていたためです。
日本におけるボランティアは、個人があるコミュニティに社会奉仕して、自己満足して、というように、個人のなかで完結している場合が多いのです。けれど、海外では、財団がプライベートファンデーションという形で、ボランティアの際のファンドを集めた上で、支援が必要な現場に、組織的にかかわります。日本では、こういうボランティアのかかわりかたは、あまり見られませんよね。
だから、財団という組織的な形で、災害支援にたずさわろうと考えたのです。

Q18：財団立ち上げ時の財源は？

一般財団法人ということですので、財団立ち上げの際には、財源をご自身で準備されたのでしょうか？

A18：一般財団法人設立のハードルが下がったことで拠出できた

はい。「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」（平成20 年12月1日施行）で、一般財団法人の設立の財産の拠出が300万円以上になるなど、ハードルが下がったこともありました。

Q19：他の日本のNPOなどとのちがいは？

日本のNPOの多くは、お金をうまく回せないので、苦しんでいるそうです。そんななかで、松尾さんは、最初にお金を準備して、なおかつお金を集めながら運営をおこなっていらっしゃいます。
こういうスタイルは日本ではあまり見られないように思います。他の日本のNPOなどとのちがいはありますか？

A19：われわれは自らを「財団ベンチャー」だと認識

外部の方にお話しさせていただく際に、われわれの活動を「財団ベンチャー」という言葉で説明する場合があります。どういうことか、少し説明しますね。
わかりやすいので、「神社de献血」の場合で考えてみます。世の中の人が求めていることは、実施したほうがいいですよね。これを前提とします。
たとえば、コロナ禍において東京・大阪の医療現場で輸血血液が不足するという事態が発生している。この解決のためには、コロナ禍であっても献血の会場をしつらえて実施したほうがいいわけです。
これは、どんな方でもそう考えますよね。求められているわけです。
視点を変えてみましょう。献血を実施すれば人が集まる理由にもなりますし、それにかかわる企業にとっては仕事にもつながります。地域や企業にとっても、献血をする意味がある。言い換えると献血の実施を求めていると考えていいでしょう。
このように考えを進めていくと、「献血を実施したほうがいい」と考える世の中の人、そして企業や地域が「献血実施を実現するための支援をおこなう組織」に活動費を出せば実現できる、という図式になります。
これが「お金を集めながら運営をおこなう」ということにつながっています。

つまり、災害支援に関して社会が求めていることを、それを求めた人や企業や地域に代わって、われわれが活動することで実現する道筋をつくる。それが、われわれが自身のことを、災害支援を基調として取り組んでいる「財団ベンチャー」だととらえているゆえんです。

本来は、日本の他のNPOもそういう仕組みになっているはずです。NPOの活動とは、他の人が「したい」と考えていることや、「するべきだ」と考えていることを、その人たちに代わっておこなうことです。だから、それについて「したい」「するべきだ」と考える人が、そのNPOを支援するというのが、本来の在り方です。
ただ、多くのNPOでは、おそらく感情というか思いの強さが先に出てしまっていて、その活動が、社会にどのように影響を与えて変えていくのか、そのためにどのような組織だてをおこなっていくのか、組織をどのようにつくっていくのかについての説明が、あまりなされていないのではないでしょうか。

A19［付記］（齊尾恭子）

諸説はありますが、江戸時代から明治時代にかけて全国を渡り歩いた近江商人は、商売は売り手と買い手はもちろん、世の中のためになってこそ、という経営哲学を持っていました。後に「三方よし」と名付けられたこの精神は、松尾氏の考え方とも通じるものがあります。なお、「三方よし」の考えかたは、CSR（企業の社会的責任）やESG（環境・社会・企業統治）との親和性という点から関心が高まっています。

参考：日経ビジネス編集部,「三方よしとは？CSRやESGにもつながる企業理念としての価値」,https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00081/083100422/（2023年7月18日アクセス）

Q20：ご自身の「強み」とは？

松尾さんが、この活動を行うにあたって、ご自身が自覚している「強み」のようなものはありますか？

A20：しがらみがない。だからやり切れる

自由ということ。しがらみがない、ということかなと。「しがらまない」からやり切れるんです。
自由ということは、裏を返せば孤独ということでもあります。だから、孤独に強いので、大丈夫というところかなと思います。自由で孤独に強いので、しがらみにとらわれることがないんです。
だから、かかわる相手が腹をくくっているかどうか、本気かどうかを見極めることに集中できるし、実現することだけに割り切って進むことができています。

Q21：松尾さんの組織に対する考え方、連携についての独特のノウハウは、「ご苦労された部分」を引き出す「深い質問」がなければ、伺うことができない

最後にコメントです。松尾さんは、組織に対する考え方や、その連携の仕方についても独特のノウハウをお持ちだと感じました。
そして、ご苦労された部分についてはあまりお話されないために、難しいことをスイスイとこなされているように見えます。
だから、こちらがよほど深い質問をつくって松尾さんに投げかけなければ、松尾さんが具体的にどのようなことを乗り越えて、どのように活動を推し進めているのかに触れることができないようです。
松尾さんのお考えの根っこにあるようなことにも、触れることができなさそうです。
深い質問をつくって次の機会に備えます。

A21：よろしくお願いします

はい、また来ますので、よろしくお願いします。

（質疑応答終了）

Ⅵ. 講義時使用スライド

※2021年5月18日の講義実施時に松尾氏が使用したスライド（計10枚）です。

スライド1

善意が結実した新たな献血会場

一般財団法人国際災害対策支援機構

スライド2

神社de献血について

今般のコロナ禍によって、各団体や企業による様々な行事・活動の制限や中止で献血会場が減少し、それに伴い献血活動がままならず、医療機関への血液供給に影響をきたすことが懸念されています。一般財団法人国際災害対策支援機構はコロナ禍における災害対策支援として、神社と連携し、新たな献血会場として神社で献血に取り組むこととなりました。

神社は人々が集い、心を寄せ、祈る場所であり、だからこそ、血液を必要とされる多くの命を救うお手伝いが、この場所でできれば幸いです。

スライド3

1人でも多くの方に神社での献血活動にご参加頂きたく、各神社名が記されたオリジナルスタンプを発行しています。記念として「御朱印」の挟み紙へも押印頂けます。
是非、お参りし献血されたご自身の証しとして大切にされ、それぞれの神様のご加護を受けられてください。

氏神様やお近くの神社様が会場になっていらっしゃいましたらお立ち寄りください。

神社にて皆様のご協力をお待ちしております。

スライド4

神社de献血実施神社

【実施神社　37社】

東京都　26社

浅草神社・瀬田玉川神社・太子堂八幡神社・松陰神社・亀戸天神社・穴守稲荷神社・神田神社(神田明神)・乃木神社・大鳥神社(豊島区)・多摩川浅間神社・大國魂神社・田無神社・八幡八雲神社・湯島天神(湯島天満宮)・布多天神社・久我山稲荷神社・駒繋神社・下高井戸八幡神社(下高井戸浜田山八幡神社)・居木神社・素盞雄神社・池尻稲荷神社・石神井氷川神社・靖國神社・蛇窪神社・南沢氷川神社・日枝神社

兵庫県　1社

播州三木大宮八幡宮

大阪府　9社

大阪天満宮・道明寺天満宮・茨木神社・夜疑神社・岸和田天神宮・神津神社・大宮神社・杭全神社・難波八阪神社

神奈川県　1社

若宮八幡宮

スライド5

神社de献血　経過記録

令和2年7月5日東京都浅草神社で献血スタート

令和2年8月6日太子堂八幡神社　[実施3社目]　献血記念御朱印発行(無償)

令和2年10月10日兵庫県播州三木大宮八幡宮で実施

令和2年12月1日大鳥神社　[実施10社目]　記念御朱印発行(有償)

令和3年1月から、東京都赤十字血液センターと神社de献血コラボ「神社de献血オリジナルスタンプ帳」の配布を献血会場にて開始
令和3年1月2日～4日　大國魂神社[東京府中]
令和3年1月4日～5日　田無神社　[東京西東京]
お正月の神社de献血が各新聞メディアに取り上げられ、NHKシブ5時で田無神社で献血が中継されました。

令和3年1月29日八幡八雲神社　[東京八王子]　緊急開催準備期間2日

令和3年2月から、神社de献血会場が赤十字のWeb予約システム(ラブラッド)で予約可能となる

スライド6

神社de献血　経過記録

令和3年2月21日共催：東京都神道青年会　湯島天満宮　[共催実施]

令和3年2月22日大阪府大阪天満宮で実施
大阪府神社庁と連携し大阪での神社de献血実施に向けての取り組み開始

令和3年3月21日駒繋神社　[世田谷区]
豪雨の為、他会場閉鎖の中、受付数47名、都内トップとなる

令和3年4月25日共催：素盞雄神社南千住・三ノ輪十四ヶ町若睦連合会
素盞雄神社　[共催実施]
【ベッド数6 / ベッド増設】受付数106名(連合会48名、一般58名)　最高受付数記録
一般参加者を優先してご案内頂き、受付できなかった連合会約30名が他会場での献血に回って頂く結果となりました。

令和3年5月9日神奈川県若宮八幡宮で実施
血液型別献血記念御朱印発行(無償)
血液型別献血記念御朱印発行(有償)
地域の企業様からの協賛商品が参加者へ配布されました。　　令和3年5月17日時点

スライド7

神社で献血推進活動で感謝状を授受

令和3年5月10日、東京都赤十字血液センターより感謝状をいただきました。

善意が結実した新たな献血会場として神社de献血事業の貢献を認められたものです。

当機構は、コロナ禍における災害対策支援事業として令和2年7月から神社de献血を実施しています。

一般財団法人国際災害対策支援機構は、これからも様々な機会を通じ、災害対策への貢献を続けてまいります。

感謝状

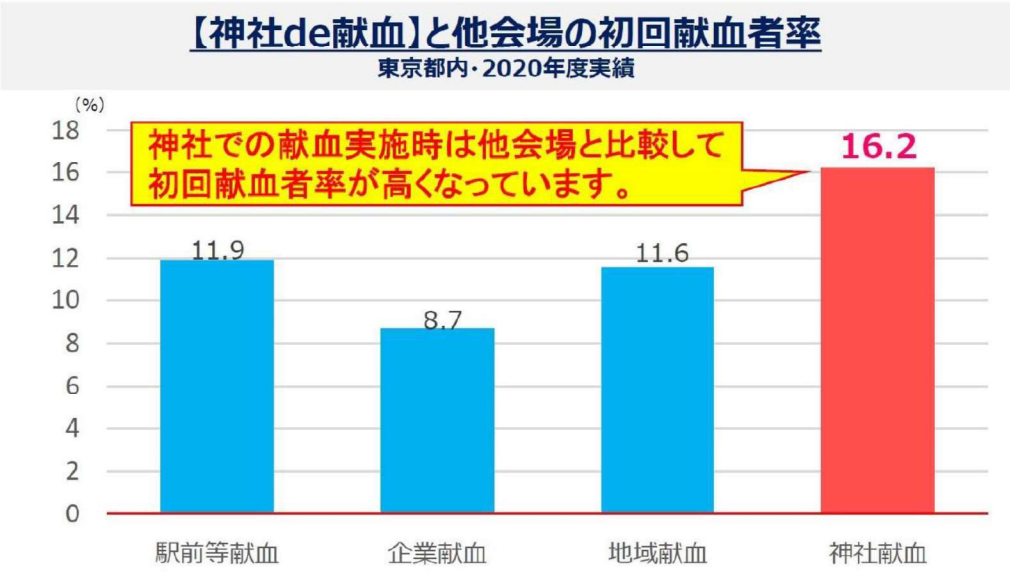
一般財団法人
国際災害対策支援機構 様

貴財団は血液事業の重要性を
理解され善意が結実した新たな
献血会場として神社での献血
推進に多大の貢献をされました
ここにそのご努力に対し深く
感謝の意を表します

令和三年五月十日

東京都赤十字血液センター
所長 加藤恒生

スライド8



スライド9

お力添えいただきたいこと

神社を舞台に紡がれる「ご縁」

『 献血したい気持ちはある。
　だけど近所で見かけないから 』
地域には“献血参加予備軍”が多数いらっしゃいます。

いのちを支えあう
その崇高な想いを抱く方々が集う機会に。

氏子の皆様・地域社会を構成する方々への
アプローチをお願いいたします。

スライド10

献血会のご周知ツールについて

①ポスター（全会場共通）

★【神社de献血】の統一仕様。
会場ごとに中央枠内（※）を変更。
催事情報や記念品案内の掲載も可。
各会場の個性が表れます。 ※

★A３またはA４サイズ（ご相談）

★SNS向け画像データも
同じ内容でご提供。
TwitterやInstagram、Facebookなど
幅広くご利用いただけます。

オリジナル記念スタンプ
印面画像が入ります

A３ポスター（瀬田玉川神社様）

②回覧用チラシ

★回覧板や商店街の置きチラシなどに

★A４両面印刷

★ご希望に応じてデータでもご提供

A４両面チラシ（瀬田玉川神社様）

献血会の記念品について

★オリジナルスタンプ帳（都内共通）

★東京都赤十字血液センター作成

★献血できた方へもれなく進呈

★使用方法に制限は設けていません

★御朱印帳と別にお持ちになり
献血記念のスタンプ集めを楽しむ
常連様も出てきています

★幅10.5cm×高さ14.8cm

会場に設置されたスタンプコーナー（久我山稲荷神社様）

以上

セレンディピティに導く「豊かさ」はどこにあるか？

あなたは自分のどこにどんな「豊かさ」があるかを自覚したことがあるでしょうか？

「神社de献血」を立ち上げる活動を追ってみると、さまざまな幸運が連鎖しているように見えます。素敵な偶然に出会ったり、想定外のものを発見したり、ありふれていることに新しい価値を発見したり、ふとした偶然をきっかけに幸運をつかみ取っているように見えませんか。これはセレンディピティ（serendipity）と名づけられています。イギリスの政治家・小説家であるホレス・ウォルポールが1754年に生み出した造語のようです。日本語として定まった訳語はありませんが、精神科医の中井久夫は「徴候的知」と呼んでいます。

ここでは、「神社de献血」のセレンディピティの軌跡を追い、それがどんな構造をもっているかを明らかにします。そして、立ち上げの活動でのセレンディピティの背後に横たわっている「豊かさ」の発見とその意味について考えてみることにしましょう。

論証構造から浮かび上がる「神社de献血」の軌跡

セレンディピティの連鎖の構造を見るために、Toulmin（1958）が提起した論証の6要素を青木滋之（2017）によって日常的な論証の中でより重要性の高い3要素に還元したモデル（図4）を用います。

```
（主張）claim: 成果、主張
  ↑
  ├──〈論拠〉warrant: 要因、意味、理由
  |
［根拠］ground: 行為、事実
```

図4．トゥールミンの論証の3要素モデルによる論証図

ここで、3要素：claim，warrant，groudに付けられた名称：主張、論拠、根拠には括弧記号を使い分けています。claimの名称としては主張、成果などを文脈応じて使い分け丸括弧：（）でくくり、warrantは論拠・要因・意味・理由などとし山括弧：〈〉、groundは根拠、行為、事実などを記し角括弧：［］を用いています。つまり、3要素の名称を文脈によって使い分けようとしていますので、括弧記号を見るだけで論証の3要素のどれかがわかるように工夫しました。

さて、第Ⅲ部の「神社de献血」実施までの流れにおいて話されている全体の構造を論証図として書いてみたものが次の図5です。

およそ10ヵ月間の「神社de献血」の立ち上げ時の活動の全体の軌跡が論証図として描かれていることがわかるでしょう。

```
(成果)「神社de献血」を10ヵ月間で54社の神社で実施できた！
  ↑
  ├──(主張)神社境内の献血会場に「神社スタンプ」を置き、来場者に押してもらう！
  │      ↑
  │      ├──〈論拠〉神社から社名の使用承諾を得て、神社ごとにデザインを変えればよい
  │      │
  │    (主張)神社の社名が入っていて、献血の記念になる「神社スタンプ」を作る！
  │      ↑
  │      └──〈意味〉神社で多くの方が献血活動に参加できるようにするには？
  │
(仮説)神社同士のつながりから「神社de献血」の活動が全国規模に広まる！
  ↑
  ├──〈論拠〉宮司から宮司への紹介で「神社de献血」の活動を広めてもらえばよい
  │
(主張)神社の境内を開放して献血会場にすることに取り組む！
  ↑
  ├──〈論拠〉「国際災害対策支援機構」の評議員の宮司さんと相談すればよい
  │      ↑
  │    (仮説)神社だ！
  │      ↑
  │      ├──〈意味〉どこであれば人がいるのか？
  │      │
  │    (主張)コロナ禍に機構が行う活動として日本赤十字の支援に入ろう！
  │      ↑
  │    [行為]日本赤十字と災害時のヘリ等による物資・人員搬送を意見交換していた
  │
[事実]コロナの自粛要請のために献血会場に人が集まらず血液が足りない
```

図5. 「神社de献血」の軌跡

8つのセレンディピティの成果

立ち上げ時の活動全体の軌跡のなかで、実は驚くようなセレンディピティによる進展がたびたびもたらされていました。よくよく調べると、次の8つのセレンディピティによる成果を取り出すことができます。

(1) 開始1ヵ月後(2020年8月6日)、太子堂八幡神社で「記念御朱印」を発行！
(2) 開始から5ヵ月後の2020年12月、開催10社目の大鳥神社(東京都豊島区)で「記念御朱印」発行
(3) 再び緊急事態宣言で献血バスを出せなくなった2021年1月29日、たった2日のSNSとWeb広報で東京都八王子市の八幡八雲神社で37名に
(4) 2021年2月21日、神社とかかわる東京都神道青年会が実施していた年1回の献血活動を共催で実施できた
(5) 翌2021年2月22日、大阪府神社庁を通じた大阪市の大阪天満宮では東京よりスピード感をもって開催！
(6) 2021年3月21日、豪雨で全献血会場閉鎖のなか東京都世田谷区の駒繋神社で都内一番の献血数(受付数47名)が悪天候でも献血に人が訪れる取り組みとして赤十字から改めて注目されるようになった
(7) 2021年4月25日、素盞雄神社(すさのおじんじゃ)では南千住・三ノ輪十四ヶ町若睦連合会との共催で150名近い献血数

（8） 2022年5月9日、神奈川県初の若宮八幡宮。宮司からの「自主的参画」の申し出と「血液型別献血記念御朱印」（有償・無償）の登場、地元企業からの「協賛品」の配付

どんな「豊かさ」がセレンディピティへと導いたか

取り出された8つのセレンディピティには、そこに行き着くきっかけがあるはずです。それは、それぞれどんなことだったかを次に抜き出してみましょう。

（1） 「神社スタンプ」ではなく「記念御朱印」が出せたらいいと考えていた
（2） スタート時に、献血をした方に有償の「献血記念御朱印」を出したいと考えていた
（3） 知名度が高まり周知されてくると、たった2日しか準備期間がなくても37名もの献血者が集まった
（4） 将来的には、神社単独の開催ではなく神社とかかわる団体と共催できればいいなと考えていた
（5） 神社庁との組織的連携ができないかと、大阪府神社庁との連携を探っていた
（6） 知名度が上がるとともに、神社と地域との深いつながりが豪雨の中での献血活動の成功へつながった
（7） 神社にゆかりの深い氏子で形成されている町会との合同開催を宮司から提案いただき大成功
（8） 将来的に血液型別の献血記念御朱印やスタンプを出したいと考えていたら、紹介ではない神社から自主的な提案があった

セレンディピティの成果と構造

このように、想定外の幸運をもたらした8つのセレンディピティという目に見える「成果」の背後には、豊かなパッション、思考、行動があったのです。つまり、一つひとつのセレンディピティの論証構造にそれぞれユニークなつながりを見つけることができますが、このパスはこのときたまたま成果につながったということがわかるだけです。このとき結果としてつながらなかった多くの多様なパッション、思考、行動がなされていたことこそが本質的に重要といえるでしょう。この多様性こそ主体的な行為者がもっている「豊かさ」なのではないでしょうか。

そして、この「豊かさ」は、わたしたちがいる困難な状況の認識を根本から変えて、ワクワクする発想の転換によって主体的で創造的に生きる道を示しているといえるでしょう。地方創生におけるこういう発想の転換の例をひとつ挙げておきましょう。

> 「たとえば人が減れば、家や土地が余る。それは『別の道に使える資産が増える』と捉えることもできる」（教育事業を手がけるベンチャー「ハバタク」の創業者、丑田俊輔）（宋・西村，2017）

さあ、みなさんも自分でも気づいていなかった「豊かさ」に囲まれているはずです。どんなものがあるでしょうか。ぜひ考えてみてください。

見つかれば、それはドラッカーのいう「強み」（井坂，2018）です。あなたの人生を自分が主人公として主体的に画期的な成果を生み出し続けるあなた自身の隠れた資源を見つけられたことになるでしょう。

阪井和男

【本稿の参考文献】

Toulmin, Stephen (1958), "The Uses of Argument", Cambridge University Press.
(邦訳は、トゥールミン(2011)
青木滋之 (2017), "拡張型のトゥールミンモデル:ライティングへの橋渡しの提案",『会津大学文化研究センター研究年報』, 第23号, pp. 5-24. https://u-aizu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=141&item_no=1&page_id=3&block_id=69 (2022年1月16日アクセス)
宋光祐・西村宏治 (2017), "先進国が問う「豊かさ」の新常識とは?:ベーシックインカムと地方移住", 特集:豊かさのニューノーマル, 朝日新聞GLOBE+, 更新日:2018.06.07 公開日:2017.12.03. https://globe.asahi.com/article/11530006 (2023年7月24日アクセス)
トゥールミン, スティーヴン (2011),『議論の技法』, 戸田山和久・福澤一吉(訳), 東京図書.
井坂康志 (2018), "強み", ドラッカー研究. http://drucker-studies.com/words/2149.html
(2023年7月24日アクセス)
中井久夫 (2004),『徴候・記憶・外傷』, みすず書房.

以上

本講義録について　-行動が共鳴をつくる-

この講義録は、明治大学法学部教授であった阪井和男先生の声掛けにより始まったプロジェクトの一環として寄稿したものです。
プロジェクトの目的は、「神社de献血」をはじめとするさまざまな取り組みを実現されている社会起業家・松尾悦子氏の「暗黙知（経験や直感などに基づく言語化しづらい知識）」を言語化し分析するというもの。
ここでは、このプロジェクトが生まれたきっかけと本講義録について記します。

この講義録が生まれたきっかけ

松尾悦子氏と阪井先生の出会いは2020年。
阪井先生は何度か松尾氏の取り組みを聞いたうえで、急速に事業が進んでいく様子、松尾氏を取り巻く環境の変化や氏の思考や行動に興味を持ち、2021年5月に松尾氏を明治大学法学部自由講座のゲストスピーカーに招きます。
このときから、阪井先生には松尾氏の取り組みを文書にまとめておきたい、という構想があったのでしょう。筆者もこの時期に「松尾さんというユニークな取り組みをしている人がいて、今度ゲストスピーカーとして授業に出ていただくので、授業を見てみてほしい」とのお声掛けで授業を見学させていただきました。松尾氏はその後も何度かゲストスピーカーとして明治大学で講義をおこないます。

そして2022年8月より、教師の「暗黙知」の記述化に携わってきた齊尾恭子氏が中心となり、プロジェクトが本格的にスタートします。
松尾氏が授業で学生たちに話した内容をたたき台に、「神社de献血」をはじめとする松尾氏の取り組みについて、そして氏の根底にある人生観に至るまで何度もインタビューや対話を繰り返しました。
ここから見えてきたことは、松尾氏がおこなっている社会事業とは、たんにアイデアや企画を考えて実行するということではないし、表面的なコツやテクニックがあれば実現できるものでもないということです。歩んできた人生、積み重ねてきた思い、そのうえで培われた技や知恵、そして人生や事業に対するスタンスがあってこそ生まれることがわかりました。
松尾氏の技や知恵、事業に対するスタンス――つまり「暗黙知」をどのように可視化するかについても話し合い、まずは学生たちに話した内容を「講義録」という形で出そうということになり、今回の寄稿文につながります。

質疑応答から見えてくる松尾氏のアプローチ

この講義録は大きく分けて2部構成になっており、前半は明治大学の授業で松尾氏が学生に話した内容を記録したもの、そして後半は学生が松尾氏におこなった21の質問をまとめたものです。
前半では、事業の初期段階から松尾氏が明確なイメージを持ったうえで、さまざまな方を巻き込みながら事業を展開していく様子がわかります。ただ、ここだけでは、松尾氏の技や知恵までは見えづらいでしょう。
実際に松尾氏と話しても、実現するにはかなり苦心するであろうことを「なんでもないこと」のように話し実行されているため、その行動の裏に何があるのかを見過ごしてしまいそうになります。

しかし、学生たちが松尾氏におこなった後半の「21の質問」を通して、松尾氏の「暗黙知」が垣間見えます。

たとえば「Q4：実施場所によるちがいはあるか？」という問いに対して松尾氏は「A4：地域の外的環境と『人』に左右される」と答えており、「Q5：実施を左右するのは『人しだい』か？」という質問に対しても、「A5：ひとりでは不足で、かかわる双方に『人』が必要」と答えています。事業の起点は松尾氏の思いやプランニングによるものですが、その成否を分けるのは人であると明確に答えています。
では、どのように人とかかわってきたのか？
それも質疑応答から見えてきます。「Q7：異質な組織同士の連携を実現するには？」という質問には「A7：腹をくくること、そして腹をくくらせること」と答え、「Q8：実施の上で欠かせないことは？」という質問には「A8：具体的な段取りを提示し、その実行を厳格に求めること」と答えています。どちらも自分だけでなく、相手、それもおそらく組織の中の個人に向けてある種の覚悟を求めるような、かなり強い言葉を使っているといえます。
新規事業ともいえる「神社de献血」をおこなうにあたって、最初からここに書かれているような言葉を使ってはうまくいかないでしょう。強い言葉は、相手との関係性や距離感、そして時期を見極めないと逆効果ともなります。このやり取りまでに、まず個対個として向き合い、相手と距離を測ったうえで、適切なタイミングで実行を促して事業を着地させていることがうかがえます。
松尾氏によると、このようなアプローチは特別なものではなく、「言うべきときに言うべきことを言っただけ」とのことです。あたかも武道の達人がスッと間合いを詰めて相手の懐に入り、わずかな足さばきで相手を制しているかのようです。
養神館合気道の創始者で達人として名高い塩田剛三氏は、著書『合気道人生』のなかで「ここぞというときに技をかけるタイミング、相手が飛びかかってきたときに、それを外すタイミング、または逆にそれを迎えるタイミング、どれをとっても、これが相手を制する上での大事な基本」と書いています。まさに松尾氏のアプローチを言い表しているかのようです。
ほかにもこの質疑応答には松尾氏のさまざまな「暗黙知」が表れているので、そのような視点から読んでいただくと興味深い発見があるかもしれません。

行動が共鳴をつくる

最初に書いたように、今回のプロジェクトは社会起業家の松尾氏の暗黙知を浮かび上がらせることを目的にしています。もちろんこの講義録はそのひとつですが、インタビューや対話を繰り返すうちに、松尾氏の思いや行動への共鳴は強まり、プロジェクトの向かう先についてもさまざまな意見交換がなされるようになりました。
デービッド・ボーンステインたちが著した『社会起業家になりたいと思ったら読む本』（ボーンステイン・デイヴィス，2012）では、社会企業をウェブの進化になぞらえて、3段階に進化したとあります。

　社会起業1.0：社会起業家に焦点があたった段階。この段階では彼らの存在やパフォーマンスにスポットをあて、その活動を支援する活動がなされる。
　社会起業2.0：社会起業家の「組織」のパフォーマンス強化に焦点があたった段階。この段階ではおもにビジネス面での協力体制が作られる。
　社会起業3.0：「生態系（エコシステム）」に焦点があたった段階。相互作用や「場」の力を重視し、ITやデザイン、マネジメント、政策立案、教育、資金提供、執筆などにかかわるあらゆる人が、それぞれの立場から変化に関与する。

これに当てはめると、まず松尾氏の思いがあり明確なイメージをもって行動を開始したことが「社会起業1.0」、松尾氏の思いに共鳴した方たちの力もあり「神社de献血」を実現させたことが「社会起業2.0」といえます。この観点から見ると、今回のプロジェクトは「社会起業3.0」ともいえるでしょう。

本講義録は、松尾氏の思いや行動への共鳴のひとつとして生まれましたが、共鳴の輪はこれからも思わぬかたちで広がっていくかもしれません。筆者自身が受け取ったのは、どのようなことでもまずは思うこと、そしてイメージをもって行動すること、すると共鳴の和が広がるということです。
松尾氏の事業にかかわる話を聞くこと、記録を読むことなどから、ひとりひとり何かを受け取って行動に移すことができたなら、これも松尾氏から始まった社会起業のひとつのかたちといえるのかもしれません。

片山 淳

おわりに

以上が、明治大学法学部自由講座で、2020年5月にコロナ禍の東京で始まった「神社de献血」事業について松尾悦子氏が話されたことと、氏と受講学生との質疑応答の様子です。そして、この講義を通じて受講生に伝えたかったことについて阪井和男先生が、また、この講義録をとりまとめるに至った経緯とその作業の中で気づいたことについて片山淳氏が、それぞれに書き添えてくださいました。
以下は、この講義録の執筆を通じて松尾氏の実践から見えてきたことについてまとめたものです。そして「神社de献血」事業のその後について記し、この講義録の結びとします。

(1)常に「自分ごと」から事業を始める

まずは、松尾氏の事業への取り組みかたの特徴は、事業活動の起点には常に「自分ごと」があるという点が見えてきました。
つまり、松尾氏は、社会の課題を事業によって解決することをめざして活動し、事業を考えるときはいつでも、「わたしのなかにあるもの」を起点にして考えているということです。
たとえば、松尾氏が代表を務めている一般財団法人国際災害対策支援機構の活動の目的は、平素は観光資源として活用でき、災害時には被災支援に活用できるヘリコプターの環境整備や、寺社の社会福祉活動の立ち上げをサポートすることです。これも、かつての松尾氏のふたつの経験が起点となっています。

ひとつには、阪神・淡路大震災に被災しながら、同時に建設業に携わるものとして被災地に入った経験からくるものだそうです。東日本大震災の復興支援に日本商工会議所のメンバーとして被災地への支援物資の輸送にかかわったという経験がそれにあたります。
もうひとつは、松尾氏がそもそもヘリコプターやドローンを用いて、災害や事故を支援することに注目したのは、子どものころからイギリスの特撮テレビ番組『サンダーバード』のファンだったからなのだそうです。
これも「わたしのなかにあるもの」といえそうです。

(2)事業を「かかわったすべてのひとの物語」としてとらえる

また、松尾氏の事業のとらえかたも、たいへんユニークだということが見えてきました。松尾氏は、この「神社de献血」事業を「かかわったすべてのひとの物語」としてとらえているからです。
起業に関するストーリーの多くは、「ある起業家」を主人公とするストーリーになりがちです。しかし、松尾氏はそういうストーリーの形で、この「神社de献血」という事業をとらえていません。その代わりこの事業にかかわったひとたちの、かかわりかたの新しさに意義を見出して、「かかわったすべてのひとの物語」として認識しているのです。

松尾氏のお話から見えてくるのは、コロナ禍という非常事態下で、社会起業家である氏の危機感に共鳴した人たちが、「神社de献血」という事業を駆動する姿です。
彼らは、所属している組織を念頭から外して、ひとりの「わたし」として、シンプルに「このたいへんな状況を変えたい」と願って、それぞれが持つ資源を、「善意」をエンジンにして持ち寄っています。そのことで、各自の立場のちがいを超えて、これまでにはなかった大切なもの(コロナ禍をものともしない新たな輸血事業のかたち)をつくりだしたのです。
そしてこのことが、この事業の拡大につながっていきます。

ひょっとすると、松尾氏が「神社de献血」という事業を「これまでとは異なるやり方で新しい事業のつくりかたを模索したすべてのひとたちの事業である」ととらえているところに、この事業が自律的で持続の可能な事業となった鍵があるのかもしれません。

（3）新しさと本質が両立した取り組み

ところで、一見、新奇性が高そうな松尾氏の事業への取り組みかたですが、実際には社会起業家として欠かせないエッセンシャルなマインドや事業の進め方を備えた取り組みかたであることにも気づかされます。
実は、松尾氏が「神社de献血」事業について話された内容は、世界のビジネススクールの社会起業のテキストに掲載されている「社会起業家になるための12のマインド」（表1）と「社会起業家になるための25のステップ」（表2）（Bornstein＆Davis、2010）の内容に、重なる点が多く見られるのです。
紙幅の都合で、それぞれの検討をおこないませんが、このことから、松尾氏の「神社de献血」事業は、新しさだけではない本質をおさえた取り組みだといえそうです。

（4）主体的ではなく利他的な意識で事業にたずさわる

松尾氏のお話の中で、筆者にとって最も印象深かったのは、事業をおこなう際の役割意識についての氏の考えかたです。まったく予測していなかった回答だったためです。
講義録の質疑応答部分の「Q14：そもそもなぜこのような活動を」と「A14：与えられた役割だから」がそれにあたります。

「そもそもなぜこのような活動を……」と学生に問われた松尾氏は、「たぶん、神様に与えられた役割を果たしているだけなので、わたしがこの活動を『やりたい』と思っているのではなく、その場その場でやっているだけです。なぜ、自分がこのようなことをしているのか、よくわからないのです。『やりたいこと』というわけではなく、与えられた役割なのだと思います」と回答しています。
松尾氏は、事業にたずさわる際、その事業を自らが計画したものとして取り組むのではなく、その場で与えられたものを引き受けているととらえているのです。筆者はこのことに驚きを感じました。
そして、この松尾氏の発言には、東京工業大学未来の人類研究センターの「利他プロジェクト」を進めている中島岳志氏が言うところの、思いがけなく飛び込んでくるような、人間の意思を超えたものの存在の中にあるという「利他の本質」（中島、2020）との類似性が見られます。この「利他の本質」は、今後、松尾氏の実践を検討していく際の手がかりとなる概念になるかもしれません。

以上4点が、松尾氏のお話と学生との質疑応答の様子から見えてきたことです。

最後に、「神社de献血」事業の現在（2023年6月現在）について記しておきます。
「神社de献血」事業はコロナ禍の中、順調に拡大し、実施回数累計156回、受付数累計8,348名、初回献血者数累計929名という大きな事業となりました。
そして、新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後の2023年5月8日以降は、「神社de展示祭」という新たな事業と連動させる形で継続されています。
「神社de展示祭」は、神社の境内を展示会場として、アーティストやクリエイターの作品発表の場の提供をおこなうだけでなく、地域の新しい交流の場として、自治体・関連企業等とともに、ワークショップ等の開催をおこなう事業です。

そして、この「神社de展示祭」運営費の一部は「神社de献血」活動に寄付され、「神社de献血」活動ののぼりの制作等に使用される形でタイアップが図られているそうです。
第1回の「神社de展示祭」は、2023年5月に東京都葛飾区の亀有香取神社で実施されました。なお、この「神社de展示祭」の企画も、松尾氏が「神社de献血」事業で活用する「水引」のデザイナーを探しているなかで、偶然に生まれました。
2023年の2月ごろ、松尾氏には「コロナによって閉ざされていた神社の境内が、コロナが終わって開放されたらそこに何があるのだろう」という問いが頭に浮かぶようになっていました。そんななかで、氏が「水引」を探すため、立ち寄ったギャラリーのオーナーとのやりとりから、コロナ後の新しい事業のかたちとしての「神社de展示祭」の構想が生まれたのだそうです。

社会起業家・松尾悦子氏の事業はたゆみなく続いていきますが、ひとまずここで筆をおくことにします。

齊尾恭子

表1. 社会起業家になるための12のマインド

No.	考えがちなこと	社会起業家のマインド
1	誰かが問題解決してくれるのを待つ	自分(たち)で何とかしてみせる
2	大きな問題は複雑すぎて解決できない	どんな問題でも解決してみせる
3	使える労力はあらかじめ決まっている	労力を掻き集めれば、いくらでもある！
4	短所ばかり気にする	長所に着目する
5	ピラミッド型の官僚的な組織	柔軟なチーム編成
6	一方向の上意下達	全方位型の意思疎通
7	四半期ごとの利益に気を揉む	数世代先の利益を見据える
8	ヒーローだけが変革者になれる	誰もが変革者になれる
9	問題の原因ばかりにとらわれている	いまできる変革に乗り出す
10	使い捨て型	リサイクル型
11	トップダウン	共創、コ・クリエーション
12	過去からの継続	絶えざる進化

Bornstein& Davis (2010)

表2. 社会起業家になるための25のステップ

1. 目的を持ってスタートしよう
2. 自分の得意分野に取り組もう
3. 自分のアイデアを他の人に聞いてもらおう
4. アイデアを売り込む練習をしよう
5. 取り組もうとしている問題の背景を学ぼう
6. どう現状を変えていくか作戦を練ろう
7. 成果のはかり方、評価の仕方を考え続けよう
8. どんな小さな勝利もたたえよう
9. 新しいつながりを生み出そう
10. 達人について修行しよう(無償でもいいから働かせてもらおう)
11. 政治運動のボランティアを買って出よう
12. 新聞や雑誌に出よう
13. 新聞の記者や議員に会いに行こう
14. ディナー集会を企画して、自分のアイデアについてみんなで話し合おう
15. ささやかでもよいから、すぐ達成できる目標をつくり仲間を集めよう
16. 公開討論会で質問をしよう
17. さまざまな政治観に耳を傾けよう
18. 尊敬する人たちに助言を求めよう
19. 偉人の伝記を読んでみよう
20. 新たな分野や業界、国に身を置いてみよう
21. 人前で話す訓練を積もう
22. ファイナンスを勉強しよう
23. 交渉スキルを身につけよう
24. ひらめきを大切にしよう
25. 原則には忠実に、やり方は臨機応変に

Bornstein& Davis (2010)

[付記]「社会起業家になるための25のステップ」について(松尾悦子)

わたしやわたし同様に社会起業に取り組んでいる友人たちも、この25のステップのすべてを実践しています。ただ、日本で社会起業に取り組むにはこれだけでは足りません。加えて次の3点が必要になります。ここでは「神社de献血」を例に説明します。

まずは「日本の歴史や文化を知ること」。
清浄を重んじる神社の境内で献血をおこなうというアイデアは、禁忌に触れるのではないかと考えがちです。けれど、戒律を厳守するような宗教観を持つ人が多い国とはちがって、日本は「何となく」の宗教観を持っている人が多い国です。このことを知っていれば、そのアイデアを行動に移すことができます。

次に「日本の政治のかたちについて知ること」。
「神社de献血」事業が市民にとって有益な事業であっても、日本は政教分離を原則としているので、国が直接的に神社を支援することができない現状があります。このことを知っていれば、わたしたちの機構の役割がおのずと見えてきます。わたしたちのような中間集団が間に入れば、両者をつなぐことができるのです。

最後は「世界の情勢を知ること」。
事業を立ち上げる際には、それが日本国内のことであっても「この事業は、海外のどのような情勢下であればマッチする事業なのか」について検討しておくとよさそうです。そうしておくことで、事業がしかるべき段階にさしかかると、ごく自然な流れで海外展開が視野に入ってくるためです。また、世界の情勢を意識した検討をおこなって事業を始めると、視野の狭い「独りよがり」な事業にならずにすみます。そういった点から、世界の情勢を知ることは欠かせないことだと考えています。

謝辞

「神社de献血」事業にかかわった多くの方々の存在なくしては、本稿は成り立ちませんでした。以下のみなさまに深謝の意を表します。
「神社de献血」事業の実施にかかわられたみなさま
東京都神社庁
大阪府神社庁
実施神社　54社
[東京都　34 社]浅草神社・瀬田玉川神社・太子堂八幡神社・松陰神社・亀戸天神社・穴守稲荷神社・神田神社(神田明神)・乃木神社・大鳥神社(豊島区)・多摩川浅間神社・大國魂神社・田無神社・八幡八雲神社・湯島天神(湯島天満宮)・布多天神社・久我山稲荷神社・駒繋神社・下高井戸八幡神社(下高井戸浜田山八幡神社)・居木神社・素盞雄神社・池尻稲荷神社・石神井氷川神社・蛇窪神社・靖國神社・南沢氷川神社・小平神明宮・桐ケ谷氷川神社・中目黒八幡神社・雪ヶ谷八幡神社・桜神宮・下神明天祖神社・明治神宮・亀有香取神社・上目黒氷川神社
[大阪府　13社]大阪天満宮・道明寺天満宮・茨木神社・夜疑神社・岸和田天神宮・神津神社・大宮神社・杭全神社・難波八阪神社・奈加美神社・泉井上神社・坐摩神社・住吉大社
[兵庫県　1社]播州三木大宮八幡宮
[神奈川県　5社]若宮八幡宮・星川杉山神社・相模原氷川神社・本牧神社・寒川神社
[香川県　1社]田村神社
[実施赤十字血液センター　5エリア]東京都赤十字血液センター/兵庫県赤十字血液センター/大阪府赤十字血液センター/神奈川県赤十字血液センター/香川県赤十字血液センター
そして、「神社de献血」会場での献血にご協力いただいたすべてのみなさまに、感謝申し上げます。

参考資料

Bornstein, David and Davis, Susan (2010), “Social Entrepreneurship: What Everyone Needs to Know”, Oxford University Press. (邦訳は、ボーンステイン・デイヴィス(2012))

Sivers, Derek, “First Follower: Leadership Lessons from a Dancing Guy”, 2010-02-11. https://sivers.org/ff (2023年7月17日アクセス)

Toulmin, Stephen (1958), “The Uses of Argument”, Cambridge University Press. (邦訳は、トゥールミン(2011))

青木滋之 (2017), “拡張型のトゥールミンモデル:ライティングへの橋渡しの提案”,『会津大学文化研究センター研究年報』, 第23号, pp. 5-24. https://u-aizu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=141&item_no=1&page_id=3&block_id=69 (2022年1月16日アクセス)

井坂康志 (2018), “強み”, ドラッカー研究. http://drucker-studies.com/words/2149.html (2023年7月24日アクセス)

井上英之(2021),「『わたし』から物語をはじめよう」,『これからの「社会の変え方」を、探しに行こう。』, SSIR Japan編, 英治出版.

(一般財団法人)国際災害対策支援機構サイト, https://www.unglobal.org/ (2023年7月17日アクセス)

塩田剛三・塩田泰久(2012),『塩田剛三の合気道人生』, 海鳴社.

神社de献血実施報告, https://www.unglobal.org/jinja-bd/ (2023年7月17日アクセス)

宋光祐・西村宏治 (2017), ”先進国が問う「豊かさ」の新常識とは?:ベーシックインカムと地方移住”, 特集:豊かさのニューノーマル, 朝日新聞GLOBE+, 更新日:2018.06.07 公開日:2017.12.03. https://globe.asahi.com/article/11530006 (2023年7月24日アクセス)

田辺大,「日本が変わるスイッチが入っている映像 - 裸の男とリーダーシップ」(3’16”), 2010年4月27日公開. https://www.youtube.com/watch?v=OVfSaoT9mEM (2023年7月15日アクセス)

トゥールミン, スティーヴン (2011),『議論の技法』, 戸田山和久・福澤一吉(訳), 東京図書.

中井久夫 (2004),『徴候・記憶・外傷』, みすず書房.

中島岳志 (2020),「第二章 やってくる ―与格の構造」,『思いがけず利他』, ミシマ社, 2020年.

日経ビジネス編集部,「三方よしとは? CSRやESGにもつながる企業理念としての価値」,『日経ビジネス』電子版2022年11月16日掲載. https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00081/083100422/ (2023年7月17日アクセス)

日本赤十字社献血Web会員サービス「ラブラッド」,https://www.kenketsu.jp/ (2023年7月17日アクセス)

ボーンステイン, デービッド、および、スーザン=デイヴィス (2012),『社会起業家になりたいと思ったら読む本:未来に何ができるのか、いまなぜ必要なのか』, 井上英之(監修), 有賀裕子(編集), 井上英之(監訳・編集), 有賀裕子(訳), ダイヤモンド社.

一般財団法人国際災害対策支援機構概要

災害時における支援活動や自治体との防災実働訓練をはじめ「地域での自律的な防災力」が高まることを目的とした観光防災力向上事業・寺社活用文化向上事業を展開しています。
空域を活用した観光防災力向上事業を実行する組織をFIDC（フィディック）と称し、全国の賛助会員と共に活動を行っています。

※FIDCは、一般財団法人国際災害対策支援機構の英文名General Foundation for International Disaster Countermeasure の頭文字をとった略語です
寺社活用文化向上事業を実行する仕組みをそなえの水事業と称し、全国の神社・寺院と共に“そなえの水”を活用し災害対策活動を展開しています。

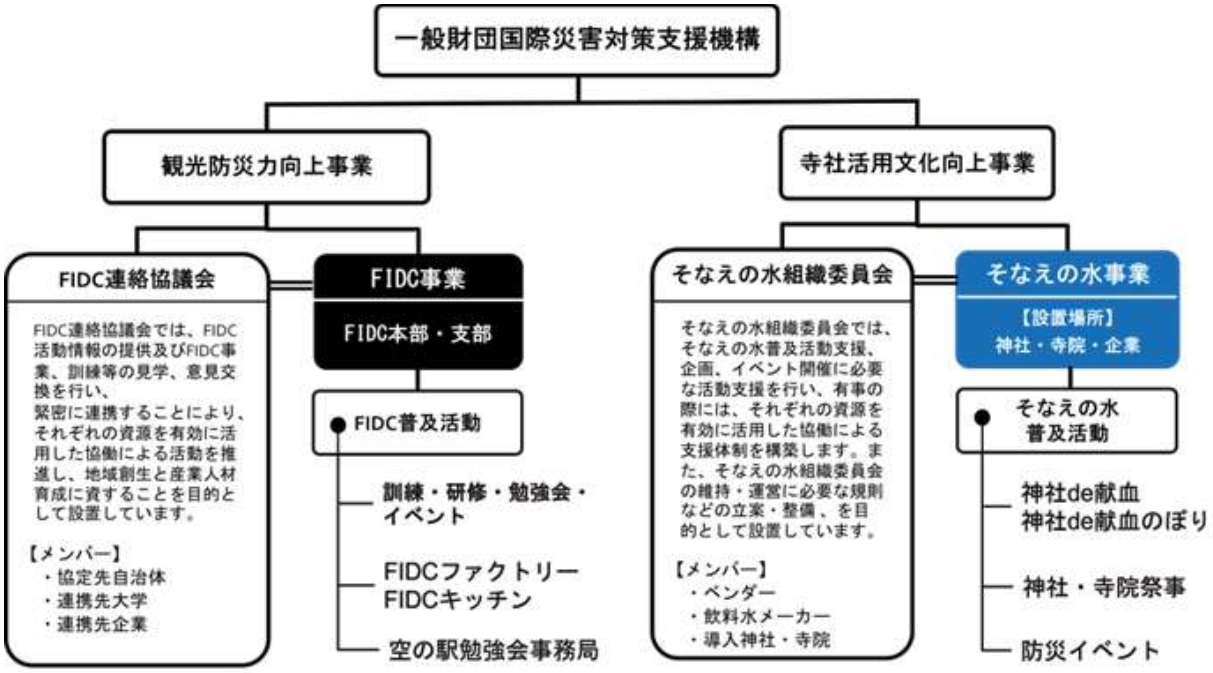


図6．一般財団法人国際災害対策支援機構の事業構成

著者紹介

齊尾 恭子(さいお　きょうこ)

サービス創新研究所研究員。京都市教育委員会現職教員研修講師(独立行政法人教職支援機構)、関西大学教育開発支援センター研究員、国立大学法人島根大学教育開発センター准教授(山陰地域ソーシャルラーニングセンター兼任)、大阪電気通信大学教育開発推進センター准教授等を経て現職。中等・高等教育機関や社会教育の現場で、学びの変容をめざした授業づくりの支援に携わる。現在は、JMOOCと日本ESD学会のSDGs教材活用プロジェクトにて、教師の実践知の記述化等を担当。協働的省察を目的とする実践家の語りの記述化に関心がある。

松尾 悦子(まつお　えつこ)

一般財団法人国際災害対策支援機 代表理事。サービス創新研究所研究員、神戸情報大学院大学客員研究員。1995年の阪神淡路大震災を経験し、震災の復興作業に従事。建設重機オペレーターとして働きながら、災害対策について考え始める。独立後は日本商工会議所に所属し、東日本大震災後は物資の輸送管理を担当。2018年に一般財団法人国際災害対策支援機構を設立。2020年から赤十字血液センターを支援し、神社を使った献血活動を展開。2021年からは災害対応型格納庫とヘリパッドの運営に取り組み、自治体との災害対策連携を進める。各地の大学と共同研究を展開し、災害対策と社会課題の解決を目指す。

阪井 和男(さかい　かずお)

サービス創新研究所・所長。理学博士。1952年和歌山市生。1971年県立桐蔭高卒。1977年東京理科大学理学部物理学科卒。1979年東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了、1985年同博士退学(6年間在籍)。1987年理学博士(論文、東京理科大学)。システムハウスSE・サイエンスライタ等を経て1990年明治大学法学部専任講師。1993年助教授、1998年教授(2023年3月定年退職:名誉教授)。その他、アカデミック・コーチング学会 副会長。日本オープンオンライン教育推進協議会 理事。実務能力認定機構 理事。教育機関の情報環境構築と人材育成協議会 理事。オープンバッジ・ネットワーク 理事など。

片山 淳(かたやま　あつし)

ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス 制作グループ課長。編集者。エンタメ系出版社で雑誌の編集を学び、フリーの編集・ライターなどを経て2006年にヤマハミュージックメディア入社。ギター系の教則本、営業などを担当し、2009年から書籍編集長として音楽エッセイ、実用書、教養書、アーティスト本などの制作に携わる。対話を通じて個の熱を引き出し企画につなげることに興味がある。大内孝夫『「音大卒」は武器になる』、仰木日向『作曲少女』シリーズ、千住真理子『ヴァイオリニスト12の哲学』など、これまで180冊以上の書籍やムックを手掛ける。